



写真でみる

あの場所の移り変わり

―― 昭和と愛知大学 ――



写真でみる

あの場所の移り変わり

―― 昭和と愛知大学 ――

目次

はじめに …… 3
1 配置図でみる建物の変遷 …… 4
2 歴史的建造物の移り変わり― 陸軍施設から愛知大学へ ― …… 10
⑴ 第十五師団司令部から大学記念館までの変遷 …… 11
・第十五師団司令部〉学校本部〉 …… 11
・本館〉大学記念館〉 …… 14
・本館からの眺望 …… 16
・コラム：門柱と塀はいつ造られたか …… 17
⑵ 将校集会所から郷土研・中産研までの変遷 …… 18
・将校集会所〉 …… 18
・図書館（初代）〉 …… 20
・国研・郷土研・中産研〉郷土研・中産研〉 …… 21
・コラム：門柱と哨舎 …… 22
⑶ 豊橋陸軍教導学校本部から図書館（2代目）までの変遷 …… 24
・教導学校本部〉通信隊生徒舎、通信講堂〉 …… 24
・7番教室、3・4番教室〉図書館（2代目） …… 25
・コラム：豊秋津神社 …… 27
⑷ 二機生徒舎から8～15番教室までの変遷 …… 28
・二機生徒舎（第二機関銃中隊の生徒舎）〉 …… 28
・8～12番教室〉8～15番教室 …… 29
⑸ 二機銃廠から生活産業資料館までの変遷 …… 30
・二機銃廠〉 …… 30
・学生ホール〉生活産業資料館〉 …… 31
・コラム：酒保 …… 31
⑹ 養正舎から教職員組合事務室までの変遷 …… 32
・養正舎〉 …… 32
・華日辞典編纂処〉教職員組合事務室〉 …… 33
⑺ 火薬庫から柔道場・空手道場・プールまでの変遷 …… 34
・火薬庫〉 …… 34
・柔道場・空手道場・プール …… 35
⑻ 豊橋偕行社から短大本館までの変遷 …… 36
・豊橋偕行社〉生徒集会所〉 …… 36
・コラム：短大4号館 …… 38
・短大本館 …… 39
⑼ 大講堂から第2体育館までの変遷 …… 40
・大講堂〉 …… 40
・コラム：大講堂前の記念樹 …… 41
・講堂・体育館〉第2体育館〉 …… 43
3 空からみる豊橋キャンパス …… 44
年表 …… 48

はじめに

愛知大学は昭和 21 年（1946）11月15日に豊橋の地に創設されました。今年はちょうど 80 周年にあたり、「愛知大学豊橋キャンパス」も80 年の歴史をたどったことになります。これを記念して、綜合郷土研究所では、「写真でみるあの場所の移り変わり―昭和と愛知大学―」という企画展を開催することとなりました。

愛知大学豊橋キャンパスのある場所には、かつて陸軍第十五師団の司令部や陸軍歩兵第六十聯隊が置かれていました。第十五師団が廃止された後には豊橋陸軍教導学校が設置され、その後は豊橋陸軍予備士官学校となりました。終戦後、愛知大学は旧陸軍施設の跡地を活用し、建物もそのまま利用して「知を愛する大学」への一歩を踏み出します。陸軍時代の建物の多くはその後解体されましたが、現在でも姿をとどめている建物もあり、門柱などの遺構も残っています。

本図録は、こうした旧陸軍時代に建てられた建造物に焦点をあて、建物の特徴や名称・用途の変遷をとらえながら、そこで日々を過ごした人々の姿を写真で紹介しています。資料には、豊橋陸軍教導学校や豊橋陸軍予備士官学校の記念アルバム、本学創立50周年事業の際に寄せられた証言や写真、そして建物の図面を用いました。過去から現在に至る建物の変遷を通して、その背景にある時代や人々の姿に思いを馳せ、現在（いま）の視点から平和を願う手助けにしていただければ幸いです。

凡例

・本書は愛知大学創立 80 周年記念事業の一環として開催する企画展「写真でみるあの場所の移り変わり―昭和と愛知大学―」（開催期間：2026 年 10 月 31 日～ 12 月 17 日）の展示図録である。

・写真は、豊橋陸軍教導学校・豊橋陸軍予備士官学校時代に制作された記念アルバム、1990 年代に行われた愛知大学五十年史編纂事業の際に卒業生や本学各課から寄せられたものなどの中から選んで掲載した。

・建物の図面は、1963 年に愛知大学が旧豊橋陸軍予備士官学校の敷地および施設の払下げを受ける際に、本学営繕課で作成したものである。

・国立公文書館アジア歴史資料センター（JACAR）のウェブサイトを活用し、防衛省防衛研究所が所蔵する陸軍第十五師団関係の史料をはじめ、多くの文献を参考にした。

・裏表紙の地図は、左は「今昔マップ on the web」データセットの浜松・豊橋 1938 ～ 1950 により作成し、右は電子国土基本図（国土地理院）を加工して作成した。

・国際問題研究所は「国研」、綜合郷土研究所は「郷土研」、中部地方産業研究所は「中産研」と表記した。

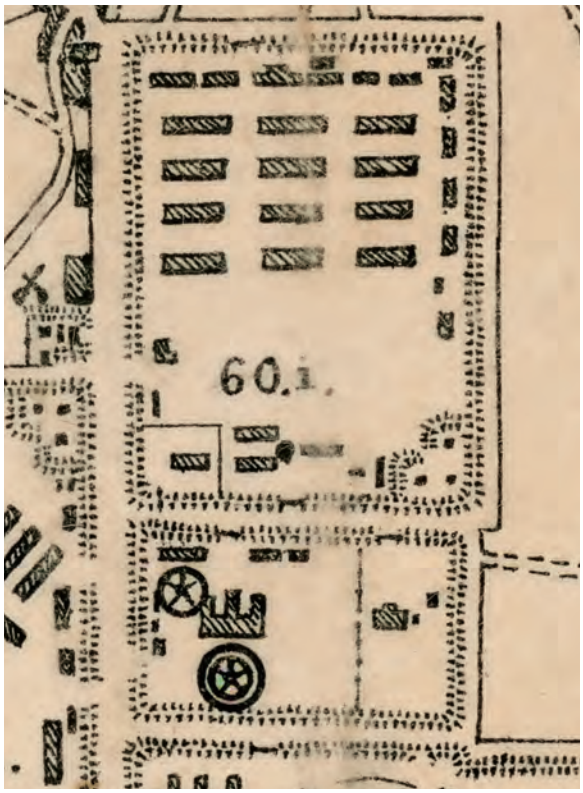
・愛知大学創立80周年記念事業における郷土研参画事業実行委員会の構成員は以下の通り。（敬称略、五十音順）

荒木亮子（郷土研研究員）、岩崎正弥（地域政策学部教授）、上田謙太郎（文学部准教授）、樫村愛子（文学部教授）、神谷智（文学部教授）、近藤暁夫（文学部教授）、中野美紀（郷土研臨時職員）、濱口庸介（郷土研職員）、廣瀬憲雄（文学部教授）、山田邦明（文学部教授）、和田明美（文学部教授）

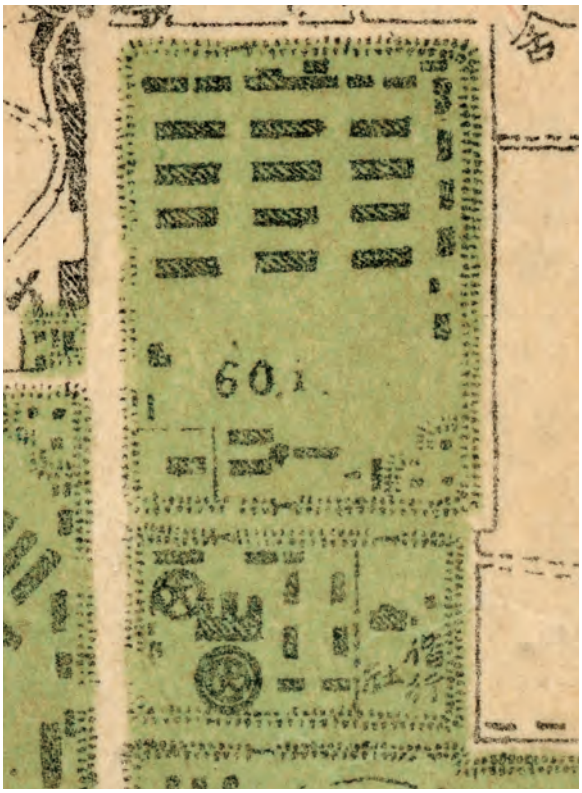
・本図録は、編集・執筆を荒木亮子および中野美紀が担当し、コラム「門柱と塀はいつ造られたか」「門柱と哨舎」「大講堂前の記念樹」は山田邦明、「豊秋津神社」「短大4号館」は橘敏夫（郷土研研究員、愛知大学非常勤講師）が執筆した。なお、監修を山田邦明がおこなった。

・現在の愛知大学豊橋キャンパス内での写真撮影は上田謙太郎が担当した。

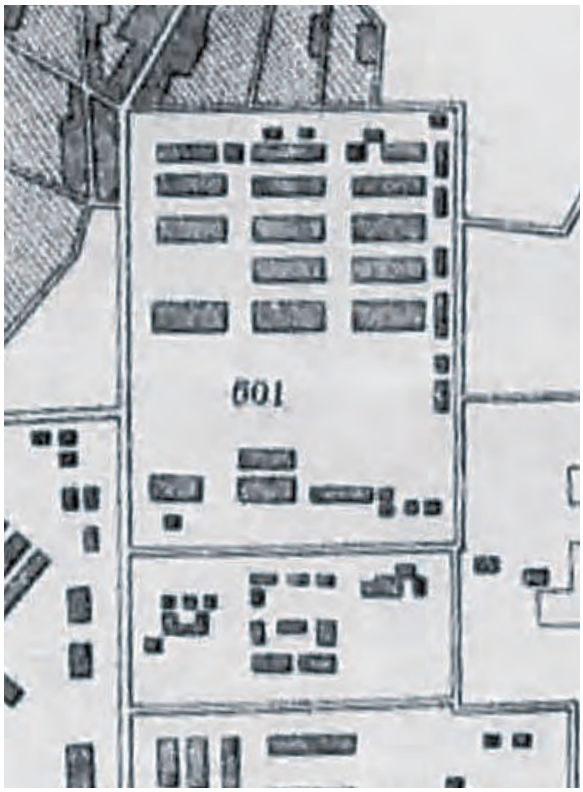
1 配置図でみる建物の変遷



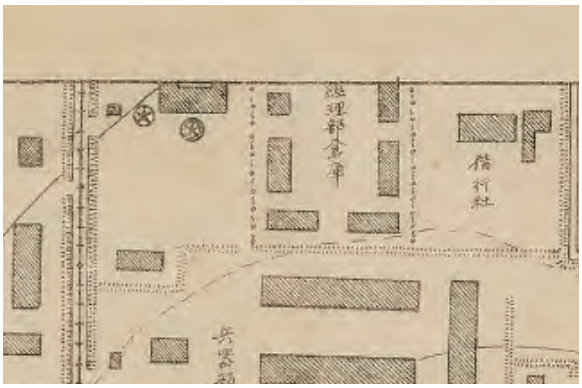
001 明治42年（1909）　第十五師団時代
明治42年 二万分の一「豊橋・高師原」第十五師団司令部発行



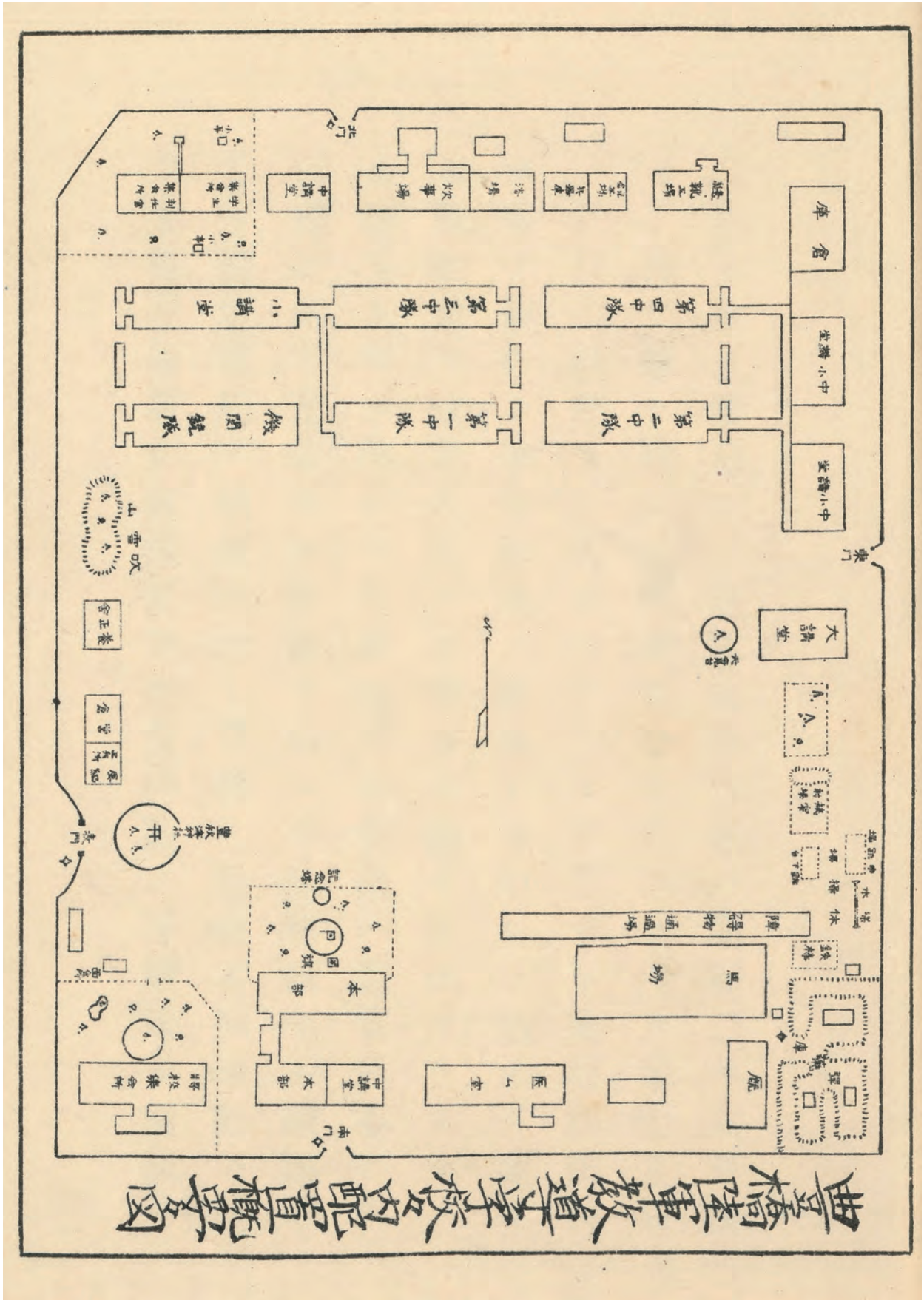
002 明治45年（1912）　第十五師団時代
明治45年6月 二万分の一「豊橋・高師原・天白原」第十五師団司令部発行
師団司令部の敷地内に、新たに6棟が増築されています。



003 大正10年（1921）　第十五師団時代
「豊橋商業会議所地区内図」『大正十年度豊橋商工案内』（国立国会図書館デジタルコレクション）
師団司令部側の敷地に建物が増えています。



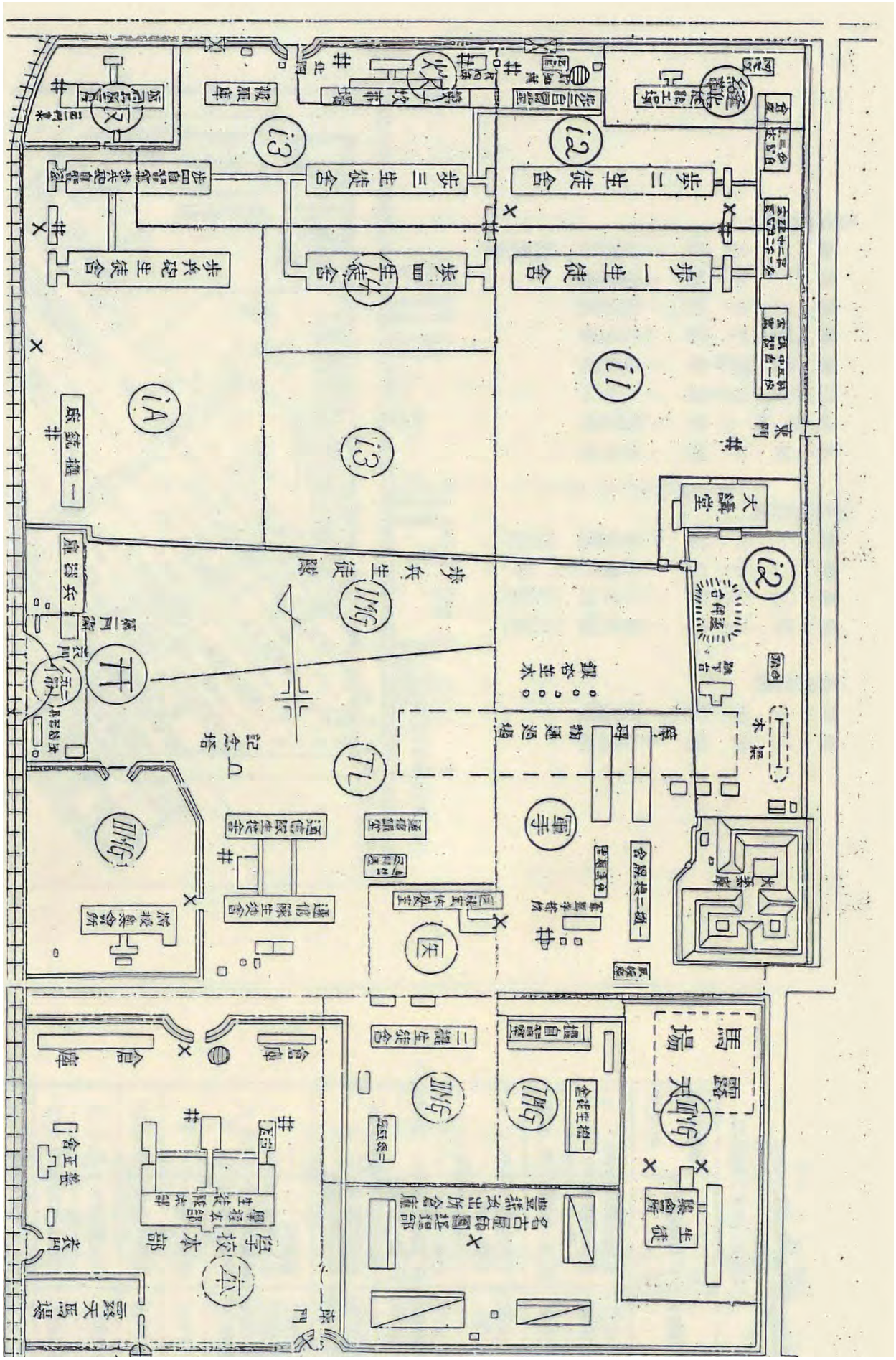
004 大正13年（1924）　第十五師団時代
大正13年 五千分の一「高師原」工兵第十五大隊作成（豊橋市図書館蔵）
師団司令部庁舎の東側に「経理部倉庫」の文字が見えています。



005 昭和7年(1932)4月～12月　豊橋陸軍教導学校時代　『豊橋陸軍教導学校一班』昭和8年1月

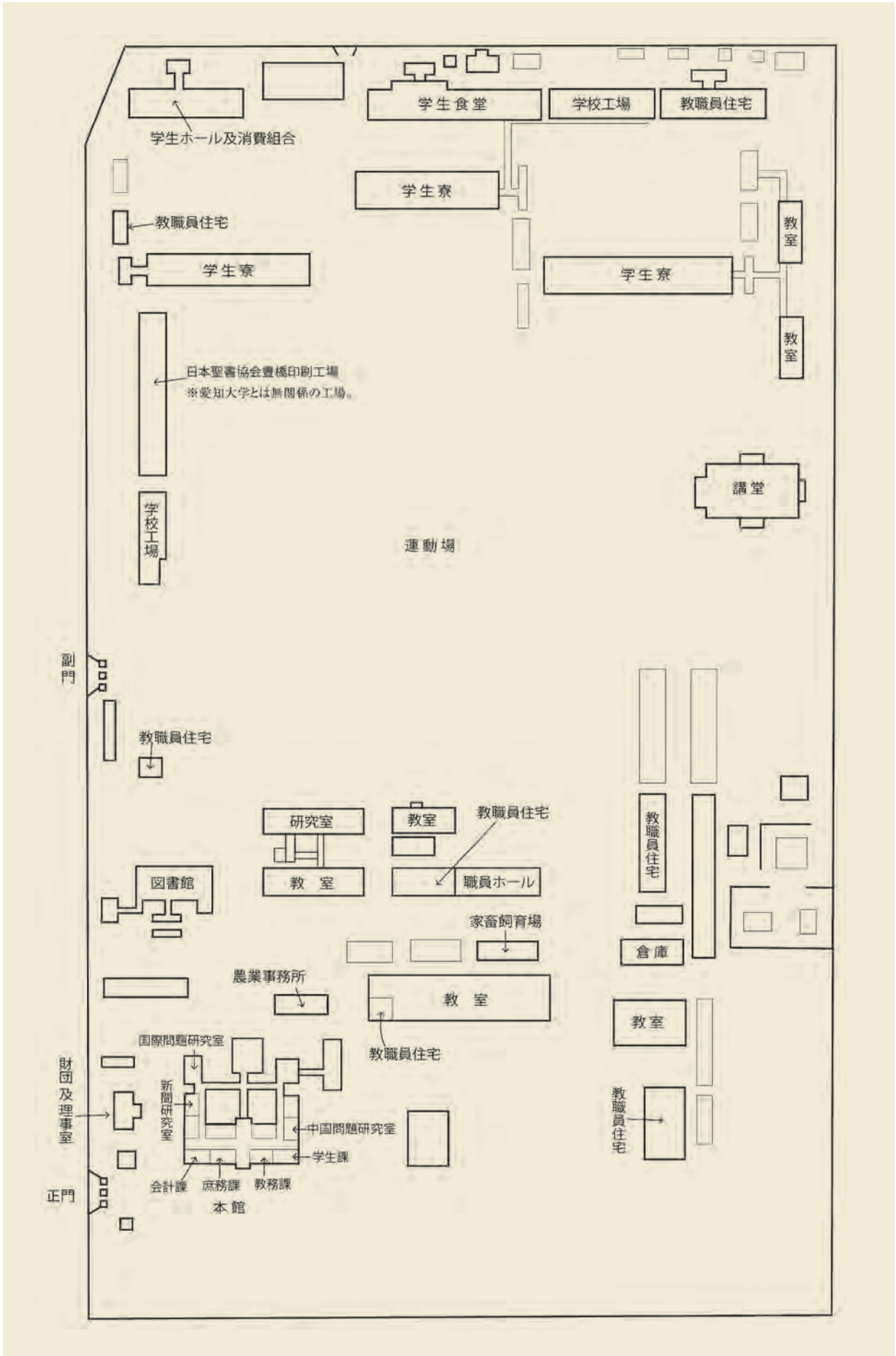
教導学校として使用されるようになり、養正舎(昭和7年竣工)、大講堂(昭和2年竣工)、勅諭塔(記念塔のこと、昭和7年4月建立)などの建造物が描かれています。

※このころの教導学校が使用していた敷地は、現在の愛知大学の敷地の北側のみです。大学記念館や研究館、2号館などのある南側はこの図にはありません。



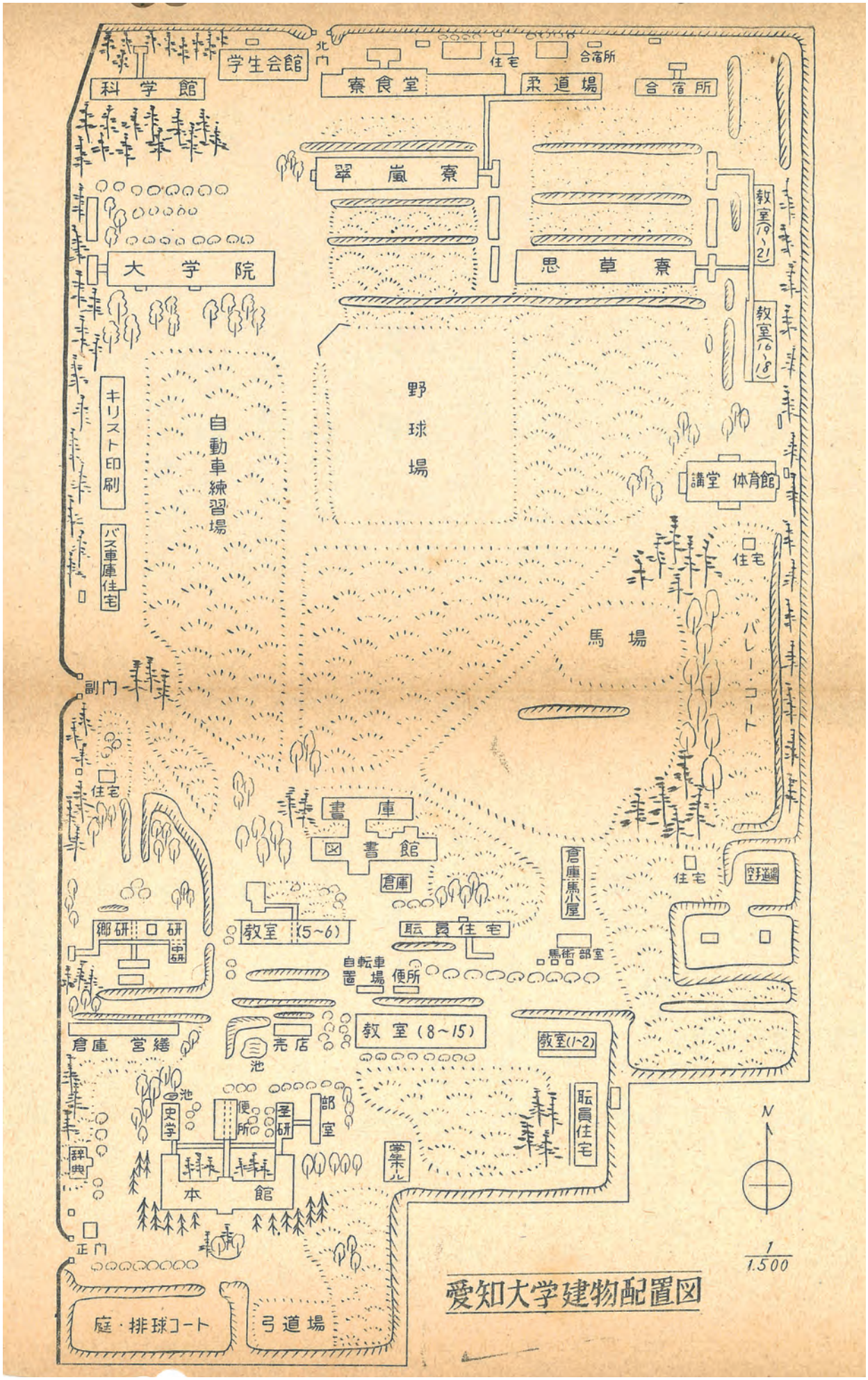
006 年代不詳（昭和15〜20年：1940〜1945）　豊橋陸軍予備士官学校時代　士魂会『五十年のむこうにあの日があった』

第十五師団・教導学校時代の図面と比較すると、用途や名称を変更している建物があることがわかります。

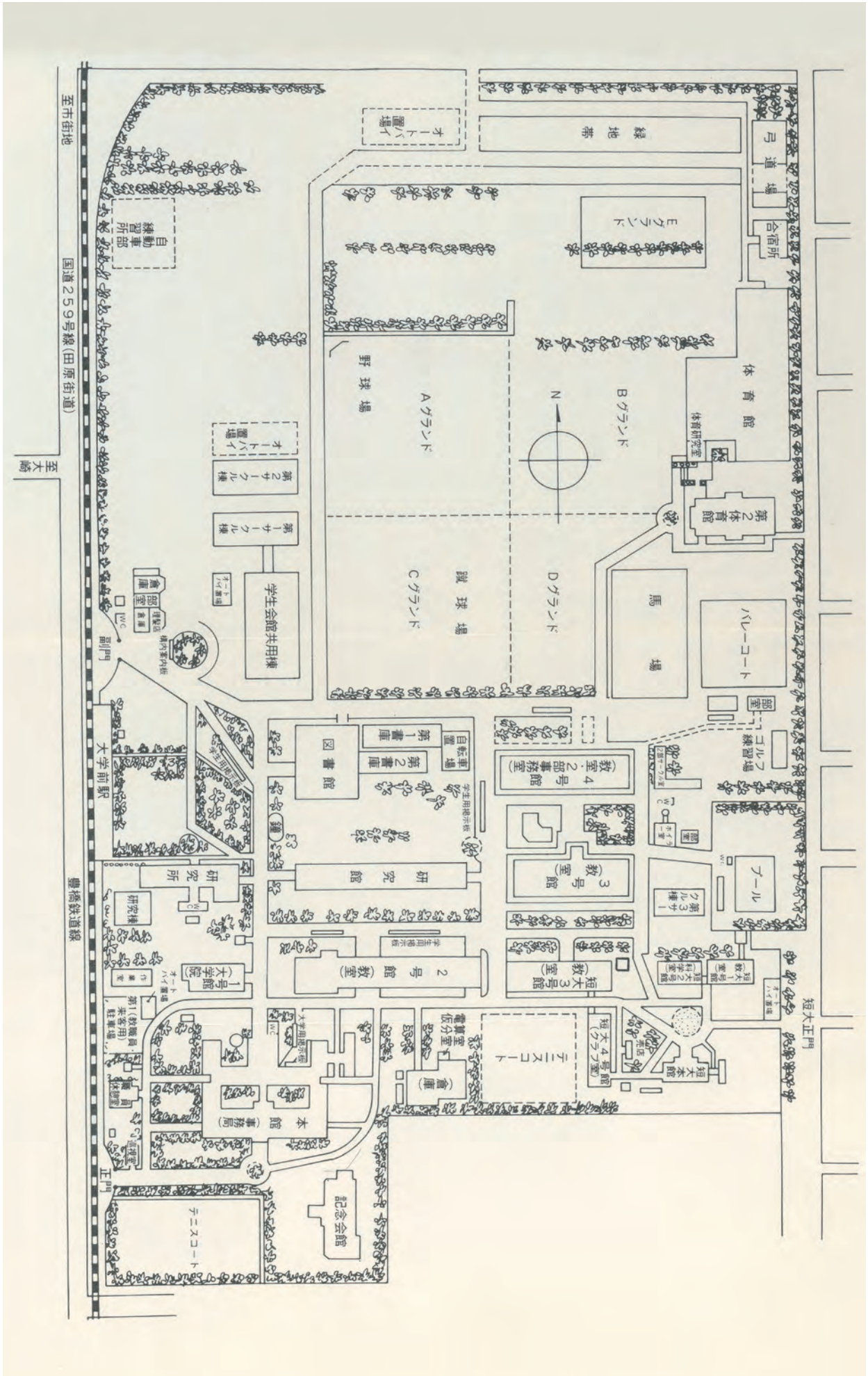


007 昭和23年(1948)頃の愛知大学　「愛知大学俯瞰図」をトレースして建物の形を修正、一部加筆

愛知大学創立から2年経った頃の配置図。戦後の食料難の対策として学内には農場、家畜飼育場、学校工場(オブラート・搾油・澱粉工場)が設置されていました。教職員住宅も多数あります。



008 昭和33年(1958)頃の愛知大学 『昭和34年度　学生便覧』



009 昭和62年(1987)の愛知大学 『1988年度　愛知大学要覧』

2 歴史的建造物の移り変わり ―― 陸軍施設から愛知大学へ ――

昭和 21 年(1946) 6 月 28 日、名古屋財務局において、旧豊橋第一陸軍予備士官学校の土地建物を「愛知綜合大学[1]の設立用として転用」することが議決されました。当時、許可されたのは土地 37,900 坪と建物延べ6,500 坪で、約 30 棟[2]が存在したと考えられますが、現在も残っている建造物はわずか５棟です[3]。

本章では、これら現存する５棟に加え、土塁の一部が残るプール、15 年前に解体された短大本館、そして陸軍施設から図書館や教室へと転用された建物を含む、下記９棟について、建築当初からの用途の変遷と歴史を紹介します。

- 第十五師団司令部(現・大学記念館)
- 将校集会所(現・郷土研および中産研の書庫)
- 豊橋陸軍教導学校本部(図書館〔解体〕)
- 二機生徒舎(８～15 番教室〔解体〕)
- 二機銃廠(現・中産研附属生活産業資料館)
- 養正舎(現・教職員組合事務室)
- 火薬庫(空手道場〔解体〕、現・プール)
- 豊橋偕行社(短大本館〔解体〕)
- 大講堂(現・第２体育館)

(1)この当時は大学名がまだ確定していませんでした。「愛知人文大学」という名称も候補に挙がっていました。
(2)土地建物使用計画書には27 棟が記載されていますが、実際にはもう少しあったようです。
(3)キャンバス敷地外の公館は除いています。



旧豊橋第一予備士官学校土地建物使用許可証（写）と土地建物使用計画書

(1) 第十五師団司令部から大学記念館までの変遷

明治 41 年(1908)、豊橋に陸軍第十五師団が設置され、司令部庁舎が建設されました。大正 14 年(1925)に第十五師団は廃止となりましたが、この庁舎は騎兵第四旅団司令部として利用されました。昭和 8 年(1933)に豊橋陸軍教導学校が拡充されると、この建物は教導学校の本部になりました。その後、昭和14年(1939)に豊橋陸軍予備士官学校が置かれると予備士官学校の本部となり、終戦を迎えます。

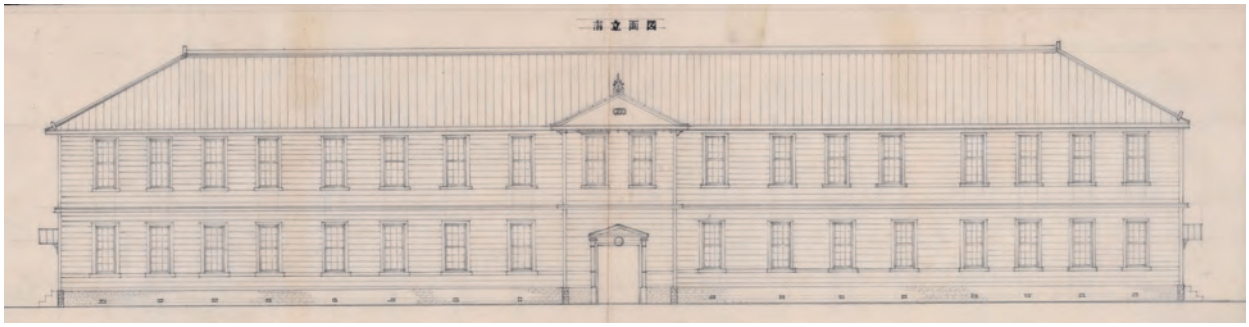
昭和 21 年(1946)の愛知大学創立後は大学の本館として 50 年間にわたり使用されました。平成 10 年(1998)には国登録有形文化財に登録され、現在は大学記念館として利用されています。

第十五師団司令部 〉学校本部 〉

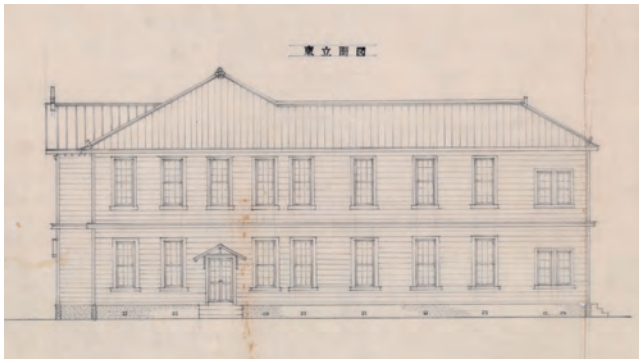
陸軍師団の建設工事は兵営の施設ごとに申請が行われ、第十五師団では憲兵隊本部と衛戍監獄に続き、明治 41 (1908)年 1 月に司令部庁舎建設のための地均し工事が認可されました。同年 3 月の指名入札を経て、司令部の建物工事は大林組が請負い、 8 月に竣工しました。豊橋の地元紙『新朝報』には、11 月 16 日の司令部開庁式に関する記事が掲載されています(1)。

敷地西側の正門から入り、円庭の左手に位置する司令部庁舎は、大規模な木造総 2 階建です。ヨーロッパ様式を取り入れた意匠が随所に施されており、当時の豊橋における本格的な西洋建築の先駆けとなった貴重な建造物です。豊橋の宮大工たちが全国を巡って修得した技術も注ぎ込まれています。

(1)『新朝報』明治 41 年 11 月 11 日号



南側立面図



東側立面図

010 東西56.4m、奥行12.9mの横長の両端に、幅7.1m奥行12.7mの建物が北側に張り出すコ字形。木造総 2 階建。屋根は寄棟で、三角形を組み合わせたトラス構造の一種、クイーンポストを採用。基礎はレンガの長手面と小口面の段が交互に現れるイギリス積。



011 1 階中央部には広い玄関ポーチが設けられており、奥の石段を上がると扉があります。ここはかつて将校たちが靴や裾の汚れを払うための空間でした。



012 木が若く、建物の外観がよく見えています。冬季のため、煙突が付いています。（昭和９年頃）



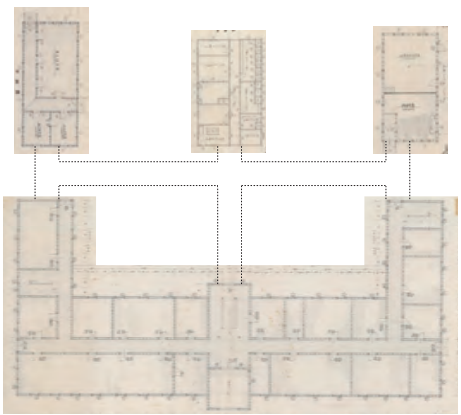
013 櫓が屋根につき、すべての窓ガラスに爆風による飛散防止のテープが貼られ、戦況の悪化を感じます。



014 師団司令部の建物は、左右対称のコ字形をしていますが、付属家を含めるとE字形になります。そのため、右の明治42年の地図などではE字形で表現されています。現在、付属家は壊され、跡地に５階建ての新本館が建っています。

明治42年の地図
（第十五師団司令部発行）





015 本館１階および付属家３棟の平面図



016 ペディメント（三角形の切妻壁面）の頂部にはアクロテリオンと呼ばれる装飾が置かれています。何のモチーフかは定かではありませんが、渦巻きと左右対称に広がる文様は、ギリシャ建築の代表的なモチーフである植物・アカンサスの葉のようにも見受けられます。



017 陸軍時代には菊花紋章がついていました。



018 ペディメントにあった菊花紋章は戦後取り外され、基盤のみが残っています。外壁は横板の上下に刻みを入れてかみ合わせることで、壁面を平らに仕上げるドイツ下見板張りです。



019 北西の角部屋の天井には、彫り物が施されています。



022 柱の飾りはイタリア風です。



020 庇には鉄製の持ち送りが付けられています。



023 受付カウンターの持ち送りも洒落たデザインでした。これが陸軍時代のものかは不明です。現在は残っていません。（平成元年）

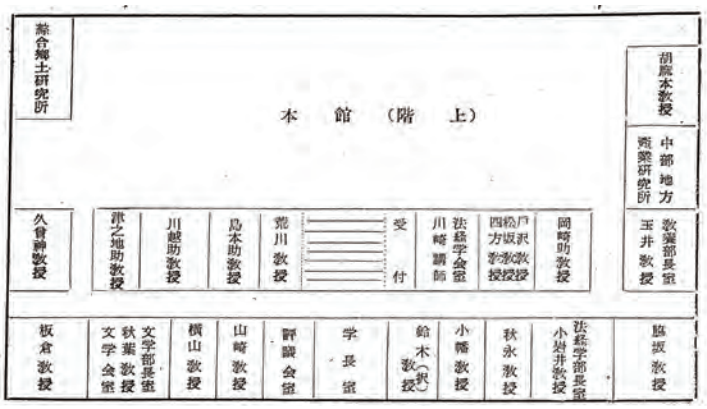


021 煉瓦布基礎の換気口。土台と上部には花崗岩を使用しています。

本館 〉大学記念館 〉

大学設立当初の本館（旧師団司令部）には、庶務課、会計課、補導課、厚生課などの事務室をはじめ、学長室、教員研究室、就職斡旋資料室、医務室、さらには女子学生控室まで設けられていました。庶務課の片隅では図書の貸出も行われており、国研、郷土研、中産研の３研究所もこの本館で発足しました。当時の大学本館は教職員や学生を支える重要な場所で、「知を愛する」大学の拠点でもありました。その後、学内の建物が順次整備され、大学創立50周年にあたる平成８年（1996）の秋に新本館（現・本館）が竣工しました。

旧司令部庁舎は建物の価値が認められ、平成10年（1998）に国登録有形文化財に登録されます。それを機に名称も「大学記念館」と改められました。現在、同館では、愛知大学およびかつて中国・上海にあった東亜同文書院大学の歴史をはじめ、愛知大学創立に尽力した本間喜一の生涯などが紹介されています。



024 昭和28年当時の本館の配置図



025 昭和30年代の庶務課。昭和22年の開講当時、この部屋の片隅で図書の貸出業務をおこなっていました。



026 手前が厚生課、奥は教務課でしょうか。



027 2階にあった中産研（昭和28年頃）



028 国研での松葉秀文教授（昭和30年頃か）



029 電話交換室（昭和30年頃）



030 階段下の部屋ですが、窓もついており、この場所も教員の研究室になりました。



031 予科卒業記念に本館前で。1列目中央左から佐々木守教授・四方博教授・神谷龍男教授。（昭和23年3月）



032 昭和27年頃の東側付属家



033 昭和40年頃の史学科教員。前列左から千葉徳爾・鈴木泰山・鈴木中正・内藤戊申・歌川學。西側付属家（史学研究室）の前の中庭で。



034 昭和40年代以降には、東側付属家の西側に掲示板がありました。休講やアルバイト情報などをここで確認しました。（平成7年）



035 本館へつづく渡り廊下（平成7年、北から）



036 東側付属家を北から見る（昭和59年頃）



037 2026年夏の大学記念館

本館からの眺望

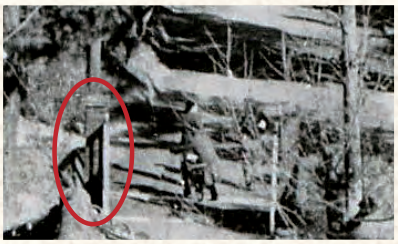


038 昭和27年に本館（旧第十五師団司令部）２階から北を写した写真です。付属家の屋根のすぐそばに自由・受難の鐘が見えます。かつては授業時間を知らせる鐘としてこの場所に設置されていました。当初は松の木に吊っていましたが、この年、卒業記念に木製の支柱が寄贈されました。またその奥には今はなき中門が見えます（昭和48年の大学院棟建設に伴い取り壊されたようです）。門を通り北に向かうとすぐ左に初代の図書館（現在の郷土研・中産研の書庫）がありました。奥に見えているのは学生寮です。

自由・受難の鐘は昭和41年の創立20周年の際、同窓会から寄贈されたブロンズの支柱とともに、現在の研究館近くへ移設されました。その後、昭和48にそよかぜ広場の隅に移されています。



中門の門柱。ぼんやりと人の姿も見えます。





039 中門越しにみる本館北側。この写真では、中門と自由・受難の鐘をはっきりと確認できます。この中門が第十五師団司令部と歩兵第六十聯隊との境界でした。

門柱と塀はいつ造られたか

愛知大学豊橋キャンパスには、国道259号線に面して2つの門があり、それぞれの門に3本の門柱が立っています。愛知大学前駅改札口のすぐそばにあるのが「副門」、南にあるのが「正門」で、副門から南に向かって長いコンクリートの塀があります。陸軍第十五師団時代の門柱(歩兵第六十聯隊の門柱と、師団司令部の門柱)はレンガ造りなので、今目にしている門柱はあとで造られたことになりますが、それはいつだったのでしょうか。

このことを解明する手がかりが最近みつかりました。『新朝報』という新聞(日刊紙)の昭和5年(1930)5月23日号の紙面に「渥電高師小池間の軌道変設工事」というタイトルの記事があり、新たに門柱と塀を造る計画が立てられていたことがわかったのです。

渥美電気鉄道株式会社では、地方鉄道法認可による国庫補助金の支給を受くべく、去る二月結ばれた陸軍側との契約に基き、同電鉄小池・高師停留所間における教導学校・騎兵第四旅団司令部・第三師団経理部豊橋派出所等の陸軍用地区域内現在の軌道に沿った土塁の場所、総面積約四千五百余坪の払ひ下げを受けて、現在敷設されてゐる県道上の軌道を移転敷設することとなり、来る七月上旬より、工事費約二十万円の予定をもって着工することとなった。これによる渥電側の国庫補助金申請の件は目下当局と折衝中であるが、八分通りまで成功とみられ、七月中には具体的決定をみる模様である。而してこの陸軍用地払ひ下げによる渥電の陸軍側に対する補償工事は、渥電兵器支廠前停留所から約十三チェーン側線を敷設して、兵器廠への兵器・弾薬の輸送に便宜を与へる事、教導学校・騎兵第四旅団司令部・兵器廠等の建造物を改造する事、取除いて軌道を敷設する土塁に代へてその内側に鉄筋コンクリートの塀及び営門を建造する事、及び豊橋衛戍地内において工事費約十万円をもって軍用道路三線を築造する事等である。この軌道変設工事完成後は小池・高師間は殆ど直線的軌道となるわけで、渥電はこれによって輸送力の拡大、運輸時間の短縮、急行電車の運転並に乗車賃銀の値下げ等を計画してゐるが、この総工事は向ふ約四ケ月を要するものと観られてゐる。

渥美電気鉄道(現在の豊橋鉄道渥美線)の軌道は、はじめは田原街道(現在の国道259号線)のまんなかを通っていました。そして、田原街道の東側には、北から南に向かって豊橋陸軍教導学校・騎兵第四旅団司令部(および第三師団経理部豊橋派出所)・兵器廠が並び、道路に面して長い土塁が築かれていました。この土塁を取り除いてその場所に新たな軌道を敷設する計画が立てられたのですが、このとき土塁(新たな軌道)の東側に「鉄筋コンクリートの塀」と「営門」を建造することが決まったのです。

軌道敷設工事は、予定より少し遅れたものの、昭和6年(1931)5月には完了しました。門柱と塀を造る工事も同時に進められたはずなので、今目にしている副門・正門の門柱とコンクリートの塀は、昭和6年に造られたことになります。今から95年前なので、5年後には100周年を迎えます。


渥電高師小池間の軌道變設工事
陸軍用地の拂下げを受けて
完成の上は賃金値下げ

『新朝報』昭和5年5月23日号
(豊橋市図書館新聞データベースより)

(2) 将校集会所から郷土研・中産研までの変遷

明治 41 年(1908)、陸軍第十五師団歩兵第六十聯隊の敷地内に将校集会所が設けられました。同部隊の廃止後、昭和 2 年(1927)から始まる豊橋陸軍教導学校時代や、昭和 14 年(1939)から始まる豊橋陸軍予備士官学校時代にも、引き続き将校集会所として使用されました。

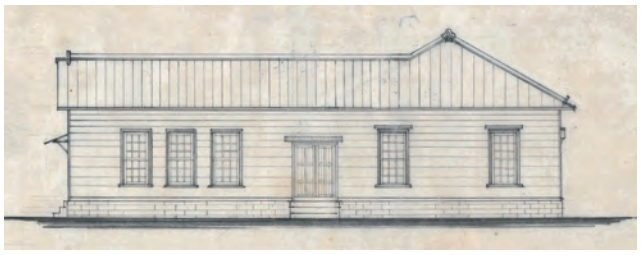
戦後、昭和 21 年(1946)に愛知大学が創立されると、翌昭和 22 年(1947)に、この建物は図書館へと生まれ変わりました。その後、昭和 32 年(1957)の図書館移転を機に、国研・郷土研・中産研が本館(現・大学記念館)から旧将校集会所へと移転しました。現在は、郷土研と中産研の書庫として貴重な資料が保存されています。

将校集会所

将校たちの集いの場は、華やかな装飾と充実した娯楽設備を兼ね備えた空間でした。建物の外観や内装の細部に施された意匠から、かつては来賓室や図書室、会食のための大ホールとして機能していたと考えられます。当時の将校たちが余暇を過ごし、交流を深めた憩いの場であったことがうかがえます。



北側立面図



東側立面図

040 基礎は高さ80㎝の煉瓦造り(イギリス積)、壁は下見板張りとなっています。屋根は寄棟主体で、部分的に切妻を付属させ、窓はすべて上下窓を採用しています。



041 将校集会所正面玄関前
昭和 2 年11月21日、豊橋市への行幸の際、休憩のため将校集会所へ向かう昭和天皇。入口では武田校長が足元を確認しています。

042 北に位置する正面玄関は来賓用で、部隊の関係者は東出入口や南の廊下を使用していました。玄関扉はのちに愛知大学が設置したものです。



043 正面玄関の上のペディメントと五芒星

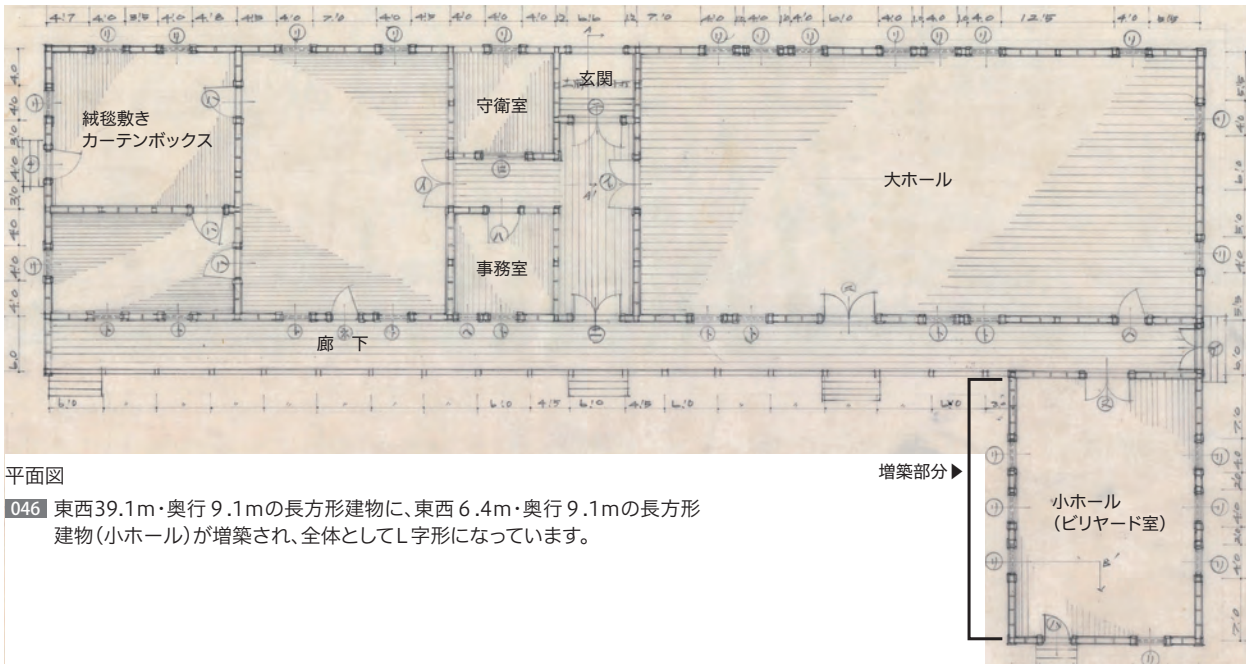




044 天井には彫刻がちりばめられたメダリオン(円形レリーフ)が付いています。



045 寄木張りで造られた大ホールの床



平面図

046 東西39.1m・奥行9.1mの長方形建物に、東西6.4m・奥行9.1mの長方形建物(小ホール)が増築され、全体としてL字形になっています。



047 もとの屋根の上に和小屋組(屋根の重さを垂直材で受ける架構)が載り、新たな屋根の裏側が見え、増築したことがわかります。



048 増築部分の小ホールは切妻屋根で、そのすぐ下にガラリ(換気口)が付いています。



049 増築部分の部屋の床にはビリヤード台の脚を固定する穴がありました。



050 基礎にはセグメンタルアーチ(平弓形アーチ)による換気口があります。

図書館（初代）

昭和 22 年(1947)1 月、開講したばかりの本学の蔵書はわずか 70 冊で、庶務課の片隅に机 2 台を並べて貸出を行っていました。教職員が東京や豊橋の古本屋で購入するなど、資料の収集に尽力していた最中、霞山文庫 35,000 冊の寄託(のち取得)が決まります。そして、同年 4 月には図書館(初代)が設置されました初代図書館は旧将校集会所の建物を使用し、5 月 21 日から閲覧業務を開始します。「木の椅子で我慢しても図書を」を合言葉に資料収集に努め、昭和 28 年(1953)には蔵書数が 10 万冊を超えました。

しかし、昭和 29 年(1954)、図書館を道一つ隔てた建物(当時の教員研究室と 7 番教室)で起きた火災を機に、耐火建築の図書館が必要とされ、昭和 32 年(1957)の書庫新設とともに図書館は移転となりました。



051 北側正面玄関。右に図書館の看板が掛かっています。



052 昭和30年に中国学術調査団が来訪し、図書館も視察しました。右から3人目が小岩井浄学長。





053 廊下に壁を付けて改造した事務室



054 図書貸出カウンター



055 木製の書棚



056 東側出入口での初代図書館長神谷龍男教授(後列右から 2 人目か、在任期間：昭和 22年 4 月～23年 3 月)と職員。ここにも図書館の看板があります。(昭和22年)

国研・郷土研・中産研 〉郷土研・中産研 〉

昭和 32 年(1957)、図書館が移転した後には、国研・郷土研・中産研が本館(現・大学記念館)から旧将校集会所へと移動しました。これら 3 研究所は、それぞれ、国研が昭和 23 年(1948)、郷土研が昭和 25 年(1950)、中産研が昭和 28 年(1953)に発足し活動していました。

その後、国研は昭和 63 年(1988)に三好校舎へ移りましたが、郷土研・中産研は 50 年以上にわたり、この建物を拠点に研究を継続してきました。両研究所も平成 25 年(2013)には現在の研究館に移転し、この建物は現在、郷土研と中産研の書庫として利用されています。



057 正面玄関には郷土研の看板が掲げられています。当初は扉はありませんでしたが、昭和50年代には設置されたようです。



058 現物の古文書を所蔵している郷土研で行われた歌川學教授による講義。壁の漆喰の疵は今でも残っています。(昭和55年頃)





059 横山将三郎教授が中心となり発掘した土器を展示していました。左は大ホールを仕切った部屋。右は廊下を改造した部屋。(昭和30年代前半)



061 東側出入口に中産研と国研の看板が掛かり、奥には廊下の一部分を改造した部屋の扉が見えています。



062 2023年春の郷土研・中産研

column

門柱と哨舎

第十五師団司令部→騎兵第四旅団司令部→豊橋陸軍教導学校→豊橋陸軍予備士官学校→愛知大学



063 豊橋第十五師団司令部営門



064『豊橋日日新聞』昭和２年11月21日号（豊橋市図書館新聞データベースより）



065『在校記念 昭和十年度学生』 豊橋陸軍教導学校騎兵学生隊第二中隊

明治 41 年（1908）、陸軍第十五師団が愛知県渥美郡高師村に置かれて師団司令部の建築がなされ、敷地の入口（西側の道路から入る場所）に門柱と哨舎（見張り番がいるところ）が建てられました。第十五師団の時代の絵葉書の写真から、レンガ造りの門柱３つと哨舎があり、門柱には「陸軍第十五師団司令部」「騎兵第四旅団司令部」という表札が掲げられ（騎兵第四旅団司令部もここに置かれました）、門柱の左右には土塁があったことがわかります。063

大正 14 年（1925）に第十五師団が廃止されると、師団司令部の跡は騎兵第四旅団司令部となり、門柱は旅団司令部の門柱として利用されました。昭和２年（1927）の昭和天皇臨幸の際、旅団司令部は御座所になり、『豊橋日日新聞』に正門の写真が掲載されましたが、「騎兵第四旅団司令部」という表札がはっきりと見えます。064

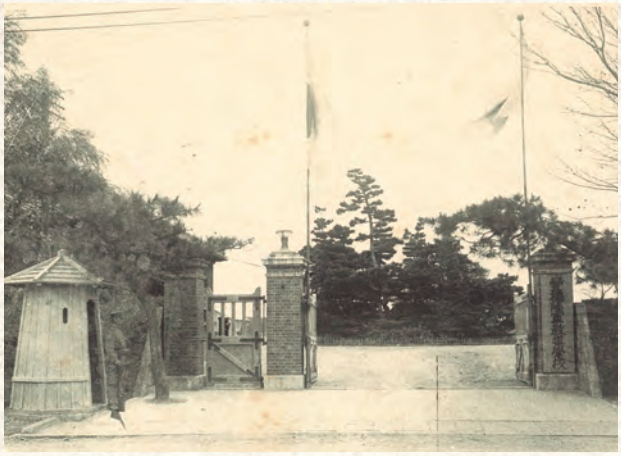
昭和６年（1931）、渥美電鉄（現在の豊橋鉄道渥美線）の路線変更のため、門柱と土塁が撤去されて、新たな門柱とコンクリートの塀が作られました。現在の愛知大学正門とこれにつながる塀は、この時に建造されたものなのです。モダンでオシャレな門柱は、はじめは騎兵第四旅団司令部の門柱として利用されました。昭和８年（1933）に豊橋陸軍教導学校（当初は歩兵科のみ）に騎兵科・砲兵科が増設され、旅団司令部の敷地が教導学校の敷地に編入されると、旅団司令部の門は教導学校の正門になりました。この後の『教導学校卒業記念写真帖』には正門の写真がいつも掲載され、「豊橋陸軍教導学校」の表札が掲げられていたこともわかります。065

昭和 14 年（1939）に教導学校が西口町に移転し、豊橋陸軍予備士官学校がその跡地に置かれると、この門柱は予備士官学校の正門として利用されたものと思われます。昭和 21 年（1946）に愛知大学がこの地に置かれたあとは、大学の正門となり、現在に至っています。

歩兵第六十聯隊→豊橋陸軍教導学校→豊橋陸軍予備士官学校→愛知大学



066 豊橋第十五師団 歩兵第六十聯隊営門



067『卒業記念写真帳 第三期学生』豊橋陸軍教導学校学生隊機関銃隊（昭和５年11月）



068『在学記念 第六期第二次』豊橋陸軍教導学校（昭和９年）

明治 41 年(1908)、陸軍第十五師団が愛知県渥美郡高師村に置かれて、師団司令部の北に歩兵第六十聯隊が配置され、敷地の入口(西側の道路から入る場所)には門柱と哨舎(見張り番がいるところ)が建てられました。第十五師団の時代の絵葉書の写真から、レンガ造りの門柱３つと哨舎があり、門柱には「歩兵第六十聯隊」という表札が掲げられ、門柱の左右には土塁があったことがわかります。066

大正 14 年(1925)に第十五師団は廃止されますが、昭和２年(1927)、歩兵第六十聯隊の跡に豊橋陸軍教導学校が設置され、門柱は教導学校の正門になりました。『教導学校卒業記念写真帖』には門柱の写真があり、「豊橋陸軍教導学校」という表札が見えます。067

昭和６年(1931)、渥美電鉄(現在の豊橋鉄道渥美線)の路線変更のため、門柱と土塁が撤去されて、新たな門柱とコンクリートの塀が作られました。現在の愛知大学副門とこれにつながる塀は、この時に建造されたものなのです。モダンでオシャレな門柱は、はじめは教導学校の門柱として利用されました。昭和８年(1933)に教導学校(当初は歩兵科のみ)に騎兵科・砲兵科が増設され、騎兵第四旅団司令部の敷地が教導学校の敷地に編入されると、旅団司令部の門が教導学校の正門となり、教導学校正門は「歩兵学生隊表門」となりました。この後の『教導学校卒業記念写真帖』の中の写真を見ると、門柱には「歩兵学生隊表門」という表札が掲げられています。068

昭和 14 年(1939)に教導学校が西口町に移転し、豊橋陸軍予備士官学校がその跡地に置かれると、この門柱は「予備士官学校歩兵生徒隊」の表門として利用されたものと思われます。昭和 21 年(1946)に愛知大学がこの地に置かれたあとは、大学の副門となり、現在に至っています。

(3) 豊橋陸軍教導学校本部から図書館（2代目）までの変遷

大正 14 年（1925）の陸軍第十五師団廃止後、昭和 2 年（1927）に豊橋陸軍教導学校が置かれると、旧歩兵六十聯隊の建物の一部は教導学校本部として使用されました。昭和 14 年（1939）に設置された豊橋陸軍予備士官学校時代の配置図（→ 6 頁）では、同建物は通信隊生徒舎となり、通信講堂が増築されています。

愛知大学創立後は、通信隊生徒舎と通信講堂は教室や研究室として利用されました。その後、建物の一部は焼失しましたが、昭和 32 年（1957）には、この建物は耐火書庫を隣接させた図書館（2代目）となりました。

教導学校本部 〉通信隊生徒舎、通信講堂 〉

昭和 8 年（1933）の豊橋陸軍教導学校の敷地拡大に伴い、学校本部は旧司令部庁舎へと移転し、のちに旧学校本部の建物は通信隊生徒舎として転用されました（→ 6 頁）。また、同校では昭和 12 年（1937）に通信講堂が新設されました。

通信講堂は 30 名程度を収容できる規模で、精密機材の保護と衛生管理の観点から、採光・通風に優れ湿気の少ない環境であることが求められました。そのため、床は板敷とされ、室内での脱靴が許可されていました。



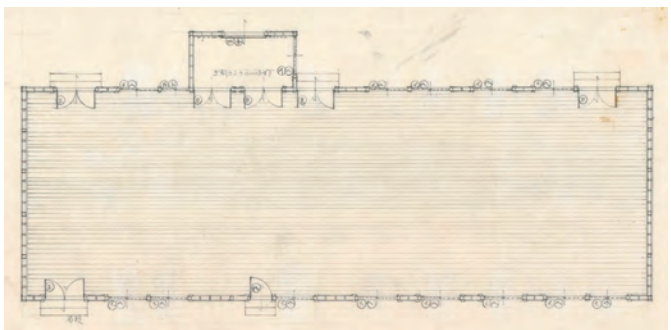
069 昭和 9 年頃の教導学校本部（のちの通信隊生徒舎）。

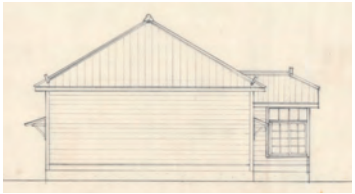


070 昭和16年の通信中隊の写真であることから、通信講堂の内部かと思われます。



コンクリート打・モルタル塗りの基礎がめぐり、壁は下見板張り、寄棟屋根でした。窓は引違いで、上部に横軸回転窓がついています。





071 桁行27.2m・梁間9.1mの長方形建物に、4.5m×2.4mの大きさの玄関ホールが張り出しています。図面では玄関に扉がついていますが、昭和 9 年頃（写真069）にはありません。

7番教室、3・4番教室 〉図書館(2代目)

愛知大学創立後、旧通信隊生徒舎は7番教室と教員研究室、旧通信講堂は3・4番教室になりました。しかし昭和29年(1954)冬、火災により7番教室棟の教員研究室部分が焼失してしまいます。このことから耐火建築の必要性が痛感され、昭和31年(1956)に、大学創立10周年記念事業の一つとして耐火書庫の建設が決定しました。同年9月に着工し、翌年3月、豊橋キャンパス初の鉄筋コンクリート建造物である書庫が完成しました。さらに、3・4番教室を閲覧室に、焼失を免れた7番教室を事務室に改築し、書庫も含め一体化した新たな図書館(2代目)が誕生しました。

その後、昭和41年(1966)の新図書館建設に伴い、2代目の図書館は耐火書庫を残して取り壊されました。



072 7番教室(昭和31年)



073 手前が3・4番教室(昭和31年)



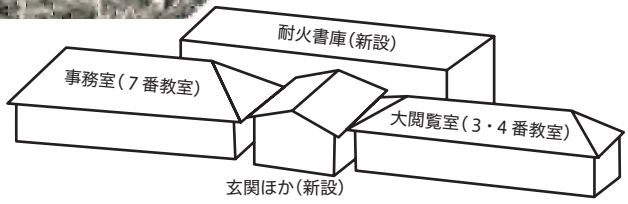
074 耐火書庫。手前にあるのは教導学校時代の勅諭塔ですが、大学では上部に電灯を付け使用しました。塔は3代目の図書館建設に伴い取り壊されました。(昭和32年頃)



075 新設された2代目の図書館の入口(昭和32年)



076 空からみた2代目の図書館(昭和40年頃撮影)

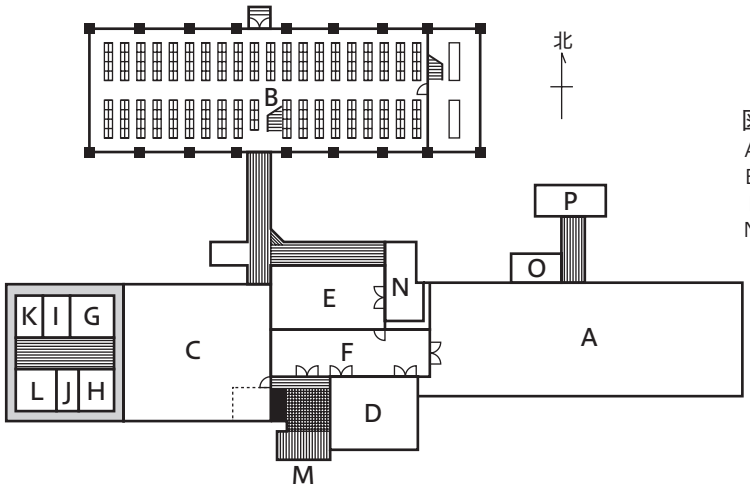




077 事務室棟と耐火書庫への通路（昭和30年代）



078 新設された耐火書庫内部　岩田ひろ子短大助手（昭和38年頃）



図書館（２代目）の平面図
A. 大閲覧室　B. 書庫　C. 事務室　D. 新聞雑誌閲覧室
E. 開架式書庫　F. 目録室　G. 印刷室　H. 館長室
I. 予備室　J. 更衣室　K. 便所　L. 宿直室　M. 玄関
N. 出納室　O. 休憩室　P. 便所



079 開架式書庫（昭和35年頃）



080 大閲覧室（昭和30年代後半）



081 雪の日の大閲覧室前（昭和40年12月）



082 2026年夏の図書館（３代目）

豊秋津神社

愛知大学副門をはいると、大きく伸びた松林が円形の石組で囲まれた場所があります。ここは昭和２年７月１日に豊橋陸軍教導学校が設立された際に神社が置かれた場所です。この神社は、歩兵第六十聯隊当時にあった射撃の神を祭祀する社殿の跡を継承し、社祠を建てたことがはじまりです。校内神社として歩兵生徒隊正門の正面に位置しました。正門の写真からみると社殿の正面はその反対側のようです。昭和４年９月23日の開校記念祝典に際し、日本の美称にちなみ、豊秋津神社と改称します。皇大神宮と明治神宮とを主神とし、昭和７年８月５日以降は、教導学校職員と卒業学生の戦死者・戦病死者を合祀しました。教導学校が西口町に移転すると、昭和14年８月から豊橋陸軍予備士官学校、同18年７月から豊橋第一陸軍予備士官学校が置かれました。豊秋津神社もそのまま引き継がれました。合祀祭も同様で、この年の９月５日には、豊橋第一陸軍予備士官学校長名で案内状が送付されました。

神社は、鳥居・社殿・社標・灯籠・玉垣からなります。このうち鳥居は、職員・学生の寄付により昭和２年11月18日に改築されました。同５年７月１日には将校集会所の寄付による石鳥居が奉献されました。社殿は、教導学校創設時に工事請負業者の林吾市が造営しました。その後、学校関係者の斡旋による豊川稲荷の寄付が昭和５年１月29日にあり、新造されました。社標は、将校集会所の寄付により昭和５年２月11日に建設されました。「豊秋津神社」と刻まれた石柱です。灯籠一対は石製で、朝鮮王族で陸軍軍人でもある李垠（イ・ウン／りぎん）の下賜金で昭和４年11月３日に奉献されました。その機縁は、李垠がこの年の２月15日に教導学校を視察したことでしょう。玉垣は、昭和６年７月１日に酒保の寄付により石垣に改造されました。

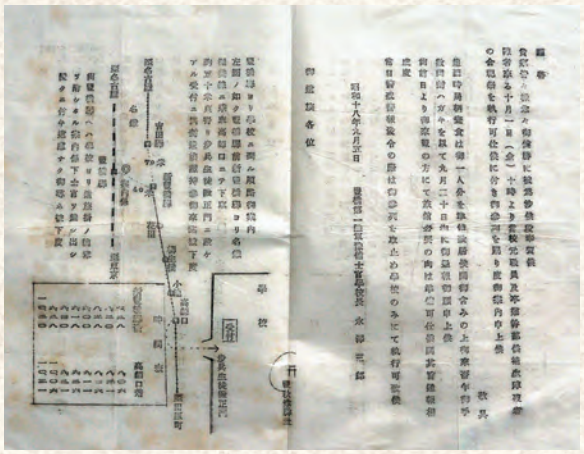
昭和20年７月31日に校名が再び豊橋陸軍予備士官学校にかわり、同年８月31日には閉校となりました。、敗戦後の混乱ではっきりとした経緯はわかりませんが、住民によって移設されたらしく、豊秋津神社の石灯籠一対と石柱は、南栄町の進雄神社境内に現存します。



083 豊秋津神社正面（昭和16年）



084 石灯籠が見えています。（昭和５年）



085 昭和18年９月に行われた合祀祭の案内（郷土研所蔵）





086 087 南栄町の進雄神社境内にある秋葉神社の前後に、豊秋津神社の石灯籠と石柱が移築されています。

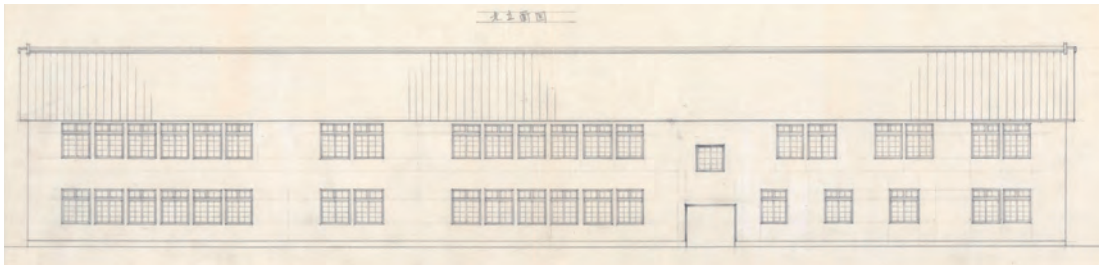
⑷ 二機生徒舎から８〜15番教室までの変遷

大正 11 年(1922)の陸軍軍縮改正において、兵器の近代化に対応すべく、重機関銃装備の機関銃中隊が新設されました。大正 14 年(1925)の第十五師団廃止後、昭和２年(1927)に設置された豊橋陸軍教導学校には、歩兵生徒隊と機関銃生徒隊からなる歩兵科が置かれました。昭和８年(1933) 4 月の陸軍教導学校令により、豊橋陸軍教導学校に騎兵科と砲兵科も加わり、当初使用していた旧歩兵第六十聯隊の敷地だけでなく、隣接する旧師団司令部の敷地や、旧野砲兵第二十一聯隊跡(現・時習館高校)も使用するようになりました。その後、昭和 14 年(1939)に設置された豊橋陸軍予備士官学校の配置図(→６頁)では、旧司令部庁舎の東側に「一機生徒舎(第一機関銃中隊の生徒舎)」と「二機生徒舎(第二機関銃中隊の生徒舎)」があったことが確認できます。

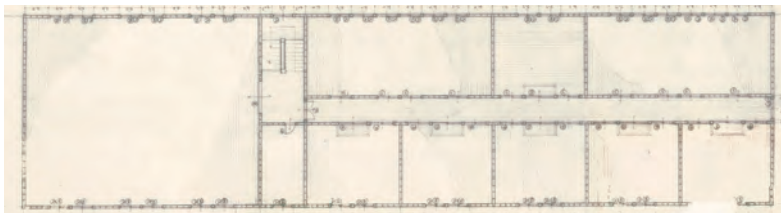
愛知大学創立後、旧二機生徒舎の建物は８〜12番教室(のちに８〜15番教室)として活用されました。

二機生徒舎（第二機関銃中隊の生徒舎）

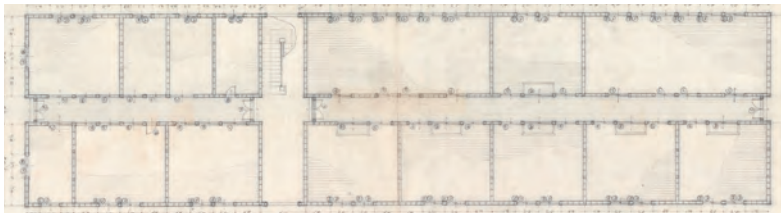
二機生徒舎をはじめとする各中隊の生徒舎は、下士官候補生が起居する平時の生活空間であり、木造２階建で１棟に一つの中隊が収容されました。建物内には小講堂と呼ばれる教育用の講堂兼自習室も設けられていました。生徒たちはこの場所で起床・就寝し、授業を受け、食事を摂り、兵器や被服の手入れを行い、自習時間を過ごし、時には語り合いました。また、夜間警戒と火災予防のために、交代で不寝番にも従事しました。



北側立面図



2階



1階

平面図

088 木造２階建。基礎はコンクリート打でモルタル塗り、壁面もモルタル塗りで仕上げていました。窓は引違い窓で上部に小窓がついていました。東西の出入口には扉がついていましたが、南北の出入口にはありませんでした。
東西57.4m、奥行14.4mの大きさで、２階西側は広い部屋になっていました。床は板張りですが、１階南北の通路のみコンクリート打でした。



西側立面図



089 西壁（昭和40年代前半か）

8 〜 12 番教室 〉 8 〜 15 番教室(1)

昭和 21 年(1946)の創立当初、愛知大学のキャンパスは旧陸軍の施設をそのまま転用しており、「校舎もまだ荒廃したままで硝子窓はこわれ、床は穴があき、隙間風は吹き込みひどい」状態でした(2)。旧二機生徒舎は教室や研究室として活用され、２階は人が歩くだけで揺れたという逸話も残っています。度重なる修理を経て長年使用されましたが、老朽化により、昭和 48 年(1973)にコンクリート造の新校舎(現２号館)に建て替えられました。

(1) 1 号館と呼称した時期もありました。
(2) 津之池直一「愛大の草創期」『愛知大学二十年史』



090 8 〜12番教室の前で日向ぼっこをする学生たち。(昭和29年２月)



091 昭和34年の伊勢湾台風により東壁が脱落しました。



092 北西からみた 8 〜15番教室。手前に土塁が見えています。(昭和30年代後半か)



093 壁が白く塗りなおされています。「ホワイトハウス」と呼ばれることもありました。手前にあるのは学生ホール(→31頁)。(昭和40年)



094 外壁が再び傷んできているのがわかります。(昭和47年)



095 2026年夏、8 〜15番教室の跡地に建つ２号館

(5) 二機銃廠から生活産業資料館までの変遷

昭和 15 ～ 20 年頃(豊橋陸軍予備士官学校時代)の配置図(→ 6 頁)には、「二機銃廠」と書かれた建物が描かれています。この建物は、第十五師団司令部庁舎(現・大学記念館)の東側約 50 m のところに位置しています。明治 45 年(1912)の図面(→ 4 頁)でその存在が確認できますが、明治 42 年(1909)の図面には描かれていないことから、この間の時期に建設されたものと考えられます。その後、大正 11 年(1922)の編制改正による機関銃隊の新設や、昭和 8 年(1933)の豊橋陸軍教導学校の規模拡大といった過程を経て、この建物は「二機銃廠(第二機関銃廠)」として利用されました。

愛知大学の設立後、旧二機銃廠の建物は、倉庫や学生ホール、第一体育館として利用され、現在は中産研附属の生活産業資料館として活用されています。

二機銃廠

陸軍は兵器の屋内格納を原則としており、二機銃廠は機関銃や装具を整備・保管・管理するための兵営兵器庫であったと考えられます。兵営兵器庫は兵科によって規模は異なるものの、いずれも梁間は概ね10m程度、桁行全長は用途に応じた設計でした。

陸軍省「大日記乙輯」[1]によれば、昭和 12 年(1937)から昭和 15 年(1940)にかけて豊橋陸軍教導学校および豊橋陸軍予備士官学校へ兵器が頻繁に支給されていたことが確認できます。日中戦争の激化を背景に、陸軍が下士官の教育や実践演習を重視していた当時の状況がうかがえます。

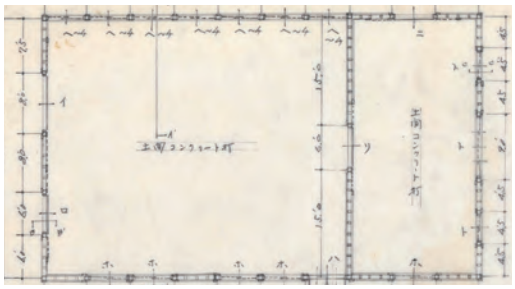
(1)兵器の頻繁な支給について、アジア歴史資料センターの検索システムを用い、防衛省防衛研究所所蔵の関連史料 11 点を確認しました。



東側立面図

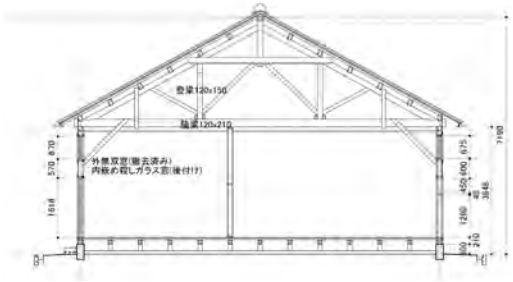


北側立面図



平面図

096 基礎は煉瓦積み、梁間10.9m、桁行18.2mの長方形、寄棟造りの建物です。大小 2 部屋に分かれ、コンクリート打ちの土間でした。外壁は下見板張りです。現在の床板と天井は後の補修です。



097 木造軸組にクイーンポストのトラス小屋組みを掛け渡して、瓦屋根を支え、方杖によって補強されています。　出典:泉田英雄2020



098 上部には無双窓がついていました。現在は一か所のみ残っています。



099 無双窓を付け替えた痕跡があります。小幅の竪板をはめ込んでいた孔が見えています。

学生ホール 〉生活産業資料館 〉

旧二機銃廠は、愛知大学設立当初は倉庫として使用されていましたが、昭和 26 年(1951)頃に学生ホールへと改装されました。約 200 名を収容できるこのホールは、学生の休憩や食事、会合の場として親しまれ、近くの売店には理髪店、書店、文具店、靴修理店なども設けられていました。

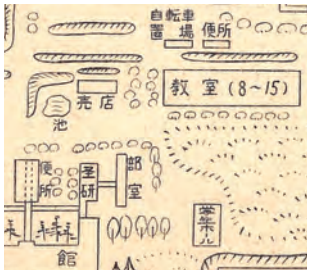
昭和 46 年(1971) 11 月、大学副門北側に鉄筋造りの学生会館が新設されたことに伴い、学生ホールは第一体育室へと転用されました。その後、昭和 58 年(1983) 12 月に新体育館(現・第一体育館)が完成すると、昭和 60 年(1985)以降は中産研の産業館第二収蔵庫となりました。現在は生活産業資料館として、三河地域にかかわる民具の保管と展示を行っています。



100 学生の憩いの場だった学生ホール。



101 拡大しないと見えませんが、庇の下に「第一体育室」の看板が掛かっています。建物の前では、あけぼの書房による教科書販売が行われていました。(昭和57年 5 月)



昭和34年愛知大学建物配置図



102 2026年夏の生活産業資料館

Column

酒保(しゅほ)

愛知大学の構内には、かつて学生ホールと売店が設けられていましたが、陸軍時代には兵営内に「酒保」と呼ばれる売店兼軽食堂がありました。酒保では毎日午前11時頃から日用品や文房具などの物品販売を行い、夕食時から午後 7 時までは飲食することができました。

第十五師団時代から存在した酒保は豊橋陸軍教導学校時代の昭和 7 年春に改装され、名称も「学生集会所」に改められました(1)。しかし、学生の間では引き続き「酒保」の呼び名で親しまれていたようです。タバコのような嗜好品や甘味は特に好まれており、昭和 16 年(1941)卒業の豊橋陸軍予備士官学校生の手記(2)には、演習が早めに終わると酒保へ駆け込み、「饅頭や羊羹を腹一杯食った時の嬉しさよ」と綴られています。また、予備士官学校の学生への支給が日給 2 銭だったのに対し、酒保での飲食は 1 回 50 銭から 1 円ほどかかったため、わずかな支給額だけでは足りなかったのでしょう。親宛ての葉書に暗号めいた「五坂神社」や「十坂神社」といった言葉を入れ、そのたびに 5 円札や10 円札の入った封書を送ってもらう学生の話も残っています。

戦局が悪化するにつれて、酒保の様子も一変します。第九期生の生活に関する手記(3)には、「酒保も時局的になった。第五期生在学当時の素晴らしさは、テンデ想像もつかない。(中略)あの当時の事から考へると今の酒保は酒保に非ずして、文房具店とでも云いたい所」と記されており、昭和 18 年(1943)当時の太平洋戦争における重苦しい空気を伝えています。

(1)建物の位置は 5 頁を参照。
(2)伊藤崇郎(1980)「『殉皇』解説」23 ~ 25 頁。
(3)伊藤崇郎(1980)「『殉皇』第一号」58 ~ 59 頁。



103 建物の後庭には、小亭(酒保庭園)もありました。(昭和16年頃)

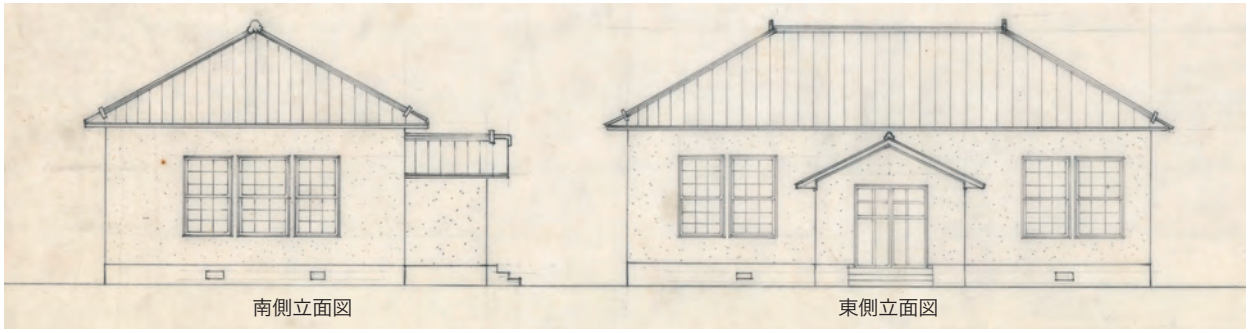
(6) 養正舎から教職員組合事務室までの変遷

昭和７年(1932)、豊橋陸軍教導学校時代に学生修養の場として建てられた養正舎は、当初、教導学校正門(現・本学副門)北側の吹雪山の麓に位置していました。その後、豊橋陸軍予備士官学校時代の配置図(→６頁)では、養正舎は現在の場所(本学正門北側)に移築されています。

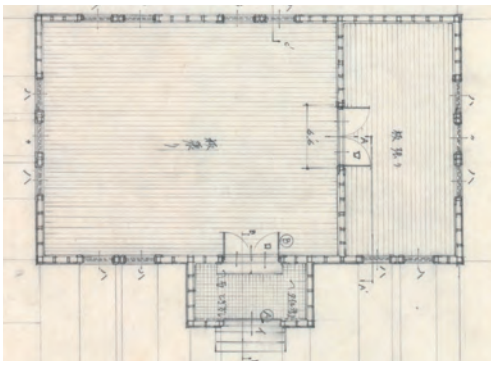
戦後まもなく愛知大学の財団事務所として使われたこの建物は、その後、華日辞典編纂処(のちの中日大辞典編纂所)を経て、現在は豊橋校舎の教職員組合事務室として活用されています。

養正舎

学生の精神修養を目的とした養正舎には、遺影や軍事に関する図書・標本の他に、古今東西の英雄偉人の伝記や一般参考書も備え付けられていました。学生が親睦を深める設備は他にもありましたが、将校・下士官・学生の三者が一堂に会し、団欒と研鑽をはかることができる唯一の場所でした。



104 桁行14.1m、梁間８mの木造平屋建。玄関ホールが外に張り出し、室内は亀鑑の間、集会の間の２部屋に仕切られています。外部がモルタル刷毛引き仕上げになっているため、下見板張りよりも洋風な印象を与えています。



平面図



105 昭和７年頃の外観。上部の看板には「養正舎」とあります。玄関ホール外側の扉がありません。





106 昭和15年頃の外観。玄関上部に「報徳養正」と書いた板が掲げられ、扉が設置されています。

華日辞典編纂処 〉教職員組合事務室

昭和 30 年(1955)に開設された愛知大学華日辞典編纂処(のちの中日大辞典編纂所)は、旧東亜同文書院大学の華日辞典原稿カード約 14 万枚を継承し、戦後の世界情勢や中国の言語環境を反映させた新しい辞典の編纂に取り組みました。13 年にわたる精緻な編纂作業を経て、昭和 43 年(1968)に『中日大辞典』を刊行しました。この辞典によって高い評価を受けた編纂処は、その後の増補改訂に向けて、昭和 50 年(1975)に組織を再編しました。その後、編纂処は三好校舎に拠点を移し、現在は名古屋校舎で活動を続けています。

旧養正舎の建物は、現在、教職員組合事務室として使われています。



107 「報徳養正」看板の跡が見えます。華日辞典編纂処の看板が掲げられています。(昭和30年)



108 華日辞典編集会議のようす (昭和30年5月)



109 華日辞典原稿カードの収納棚 (昭和30年頃)



110 ロックフェラー財団理事による華日辞典編纂処の視察 (昭和32年4月)



111 昭和10年頃の外観



112 2026年夏の教職員組合事務室

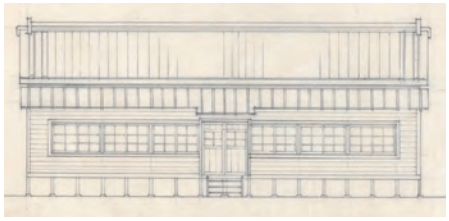
(7) 火薬庫から柔道場・空手道場・プールまでの変遷

陸軍第十五師団の兵器支廠とは別に、明治41年(1908)、歩兵第六十聯隊の敷地内に火薬庫が建てられました。愛知大学創立後、火薬庫のうち1棟は柔道場(のちに空手道場)として転用されましたが、その他の火薬庫は順次解体されました。30年余りにわたり使用された道場もやがて解体され、火薬庫跡やその周辺には、現在はプールや5号館などが整備されています。

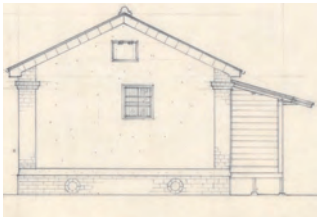
火薬庫

歩兵第六十聯隊の火薬庫は、入口を南に向けた木造建築で、内壁は羽目板の縦張り、外壁はモルタル仕上げであることから、乾燥火薬庫であったと推測されます。乾燥火薬庫に格納される黒色火薬は高湿度により劣化するため、庫内の床と壁が板張りになっているのは、木材の吸湿性を活かして庫内を一定の湿度に保つ工夫と考えられます。

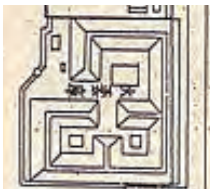
また、火薬庫の周囲には爆発時の被害に備えて土塁が築かれました。豊橋陸軍予備士官学校時代の配置図を確認すると、土塁は台形断面になっており、建築年は不明ですが、さらにその外側を塀で囲んでいたことがわかります(→6頁)。台形断面は爆風の衝撃を斜面で受けて上方に逃がす役割を果たし、外側の囲いは爆風や破片の周囲への飛散を防ぐ効果がありました。

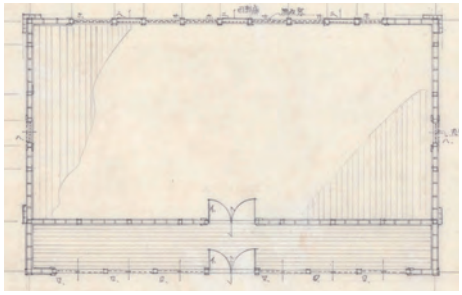


火薬庫①南側立面図



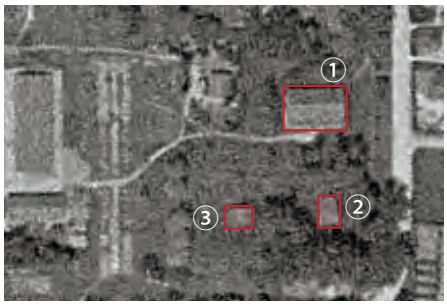
火薬庫①西側立面図





火薬庫①平面図

113 東西14.5m、奥行7.3mの長方形建物に下屋がついています。煉瓦積みの基礎で、床は板張り、内壁は縦板張りで一部木摺打モルタル塗りとなっていました。



114 空から見た火薬庫。愛知大学は①を空手道場として活用し、②をプール建設のために取り壊しました。(昭和34年)



115 空手道場として活用した火薬庫①
もともと下屋中央に出入口がありましたが、プール建築のため、新たに扉を付けています。(昭和37年)



116 火薬庫②
アーチ型に貫いた窓に四角の窓枠を付しています。火薬庫①と同じように下屋があります。(昭和37年)

柔道場・空手道場・プール

戦後、歩兵第六十聯隊の火薬庫も愛知大学の施設として使用されました。かつて３棟あった火薬庫のうち、北側の１棟は柔道場や空手道場として活用されましたが、老朽化の激しかった南側の小型火薬庫２棟には具体的な使用記録は残っていません。昭和 37 年（1962）の夏に南側の１棟が撤去され、その跡地にプールが新設されました。プールの建設に伴い周囲の土塁は一部削られたものの、東側（道路側）と南側の土塁は現在も残っています。その後、空手道場は昭和 59 年（1984）に解体され、土塁を囲んでいた塀も時期不明ながら撤去されました。現在、火薬庫跡およびその周囲の敷地は、プールおよび５号館として利用されています。



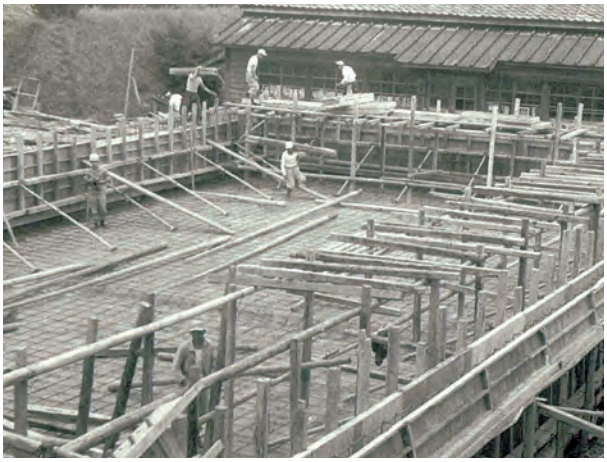
117 解体中の火薬庫②。基礎部分の煉瓦が残っています。（昭和37年）



118 土塁の中央を壊しています。大きさは高さ4.5m、上幅0.9m、敷幅7.6mで、ブルドーザーと比べるとその大きさがわかります。（昭和37年）



119 元来あった出入口。掛かっている看板は「愛知大学空手道場」でしょうか。奥の土塁は現在も確認できます。（昭和37年）



120 プール造営中（昭和37年）





121 122 解体直前の空手道場と看板（昭和58年12月）



123 2026年夏のプール。かつて火薬庫を囲んでいた土塁が、現在もビニールに覆われながらもその姿をとどめています。

(8) 豊橋偕行社から短大本館までの変遷

明治 42 年(1909)、将校の社交場として陸軍第十五師団の偕行社が建設されました。大正 14 年(1925)の同師団廃止後、昭和 2 年(1927)に始まる豊橋陸軍教導学校時代も引き続き偕行社として使われましたが、昭和 14 年(1939)に豊橋陸軍予備士官学校が置かれると、「生徒集会所」として使用されました(→ 6 頁)。

戦後、この建物は三河農村工業農業協同組合連合会の所有となりました。その後、昭和 34 年(1959)に愛知大学が女子短期大学部の設置を目指した際、賃貸借契約を経て旧偕行社を短大本館として使用しました。そして、昭和 39 年(1964)の売買契約締結により正式に愛知大学の所有となりました。

豊橋偕行社 〉生徒集会所 〉

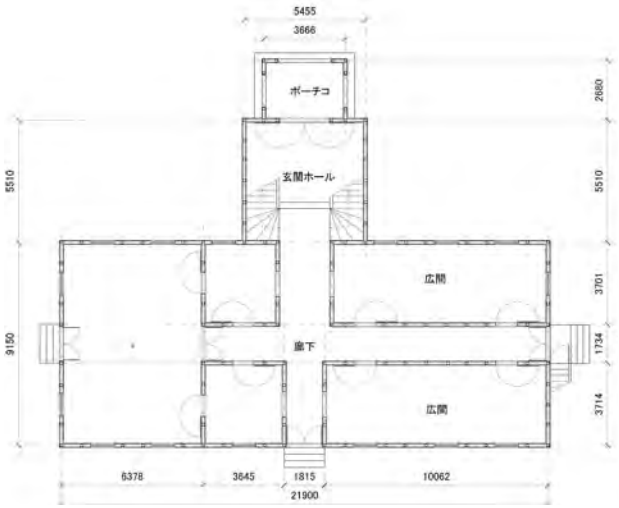
偕行社は明治 42 年(1909)、第十五師団の兵営等の建設とは別に、司令部東隣に建設されました。外観が純洋風の師団司令部庁舎や将校集会所とは少し異なり、偕行社は西洋木造建築を特徴としつつ、玄関屋根の唐破風やポーチコ(1)の雲形肘木は和風という和洋折衷になっていました。明治 43 年(1910)の皇太子(のちの大正天皇)行啓の際には、偕行社が宿舎に充てられました。

(1)主屋の入口に付された吹放しの空間。柱付きの玄関。

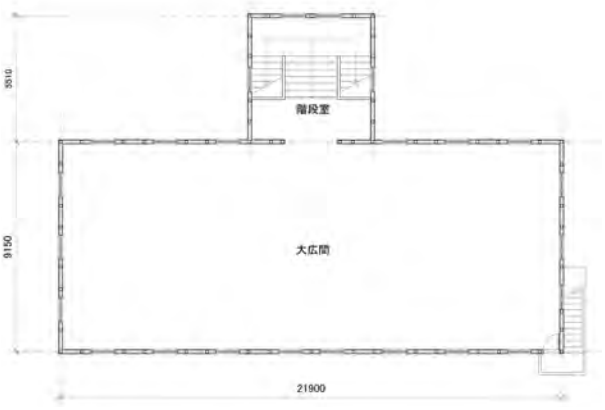


北側立面図　　東側立面図

124 木造 2 階建、寄棟造り、桟瓦葺きの建物です。桁行21.9m、梁間9.2mの長方形建物に、約 5 m四方の玄関ホール、2.7m×3.7mのポーチコがついています。



1 階平面図
1 階には受付や事務室となる大小複数の部屋がありました。



2 階平面図
2 階は多数の人が集まる仕切りのない大広間で構成されていました。

出典：泉田英雄 2013



125 竣工当初の外観。玄関ホールの入母屋屋根に唐破風がつき、和の様相を呈しています。一方で、上下窓やドイツ下見板張りなどの西洋建築を取り入れています。（明治42年）



126 ポーチコの屋根は、陸屋根で欄干が巡っています。この屋根を木製のオーダー（円柱と上部の水平梁）付きの三本角柱が支え、桁との接合部には雲形の肘木のようなものがつき、軒下にコーニス（水平に造られた突出した装飾）を配しています。



127 昭和16年頃の外観。竣工時と様相が変わり、ポーチコが改装され、陸屋根は寄棟になり、角柱は板で覆われ、大壁式となっています。



128 愛知大学になってからの写真。細かな違いはありますが、上の写真127の時期もおおよそこのような外観であったと考えられます。竣工当初にあった唐破風やペディメントがなくなり、陸屋根に出る扉は上下窓になっています。



129 昭和13年頃の偕行社内部の様子。椅子やシャンデリアの意匠が凝っています。



130 照明器具の収納飾り



131 陸軍紋章の入った通気金物



132 南東角には簡単な外階段がありました。避難階段と思われます。



133 階段と手摺（平成３年）

column

短大４号館

この建物は、歴史学者の虎尾俊哉「ハリツケ師団」（東大十八史会編『学徒出陣の記録　あるグループの戦争体験』所収）に登場します。同書によると、昭和 18 年（1943）に東京帝国大学に入学した虎尾は、授業よりも勤労動員に忙殺されていました。昭和 19 年に徴兵検査をうけ、第二乙種合格となりましたが、前後して第一期特別甲種幹部候補生を志願していたことから、同年 10 月 10 日に豊橋第一陸軍予備士官学校に入校を命じられ、歩兵生徒隊第一機関銃中隊第一区隊に編入されます。伍長に任官し、翌年6月 10 日に卒業するまでを生徒舎※ですごした、とあります。

時を経、昭和 56 年（1981）、夏期集中講義で愛知大学に出講した虎尾が、短大 4 号館をカメラに収める姿がありました。これをみた学生の問いかけに対し、「昔、ここに居た」と返した、ということです。建物は平成 6 年（1994）に解体されました。

※建物は予備士官学校時代の一機生徒舎（第一機関銃中隊の生徒舎）にあたり、のちに短大4号館として利用されました。



134 短大４号館（昭和57年頃）

短大本館

昭和 34 年(1959)、愛知大学は東三河における女子の高等教育機関として、女子短期大学部(昼間部)を設置しました。短大本館として使用されたのが、旧偕行社の建物です。竣工時の間取りは 36 頁の図面のとおりですが、本学での使用にあたり、茶室や静養室・タイプ室などに改装され、事務室だけでなく授業にも使われました。女子短期大学の中枢を担ってきた短大本館は、平成 8 年(1996)の短大事務局の新本館移転に伴い、創立から 37 年で閉鎖されました。かつて旧偕行社でもあったこの建物は、平成 23 年(2011)に老朽化のため解体されました。

※三河農村工業農業協同組合連合会が所有した時期の改装については不詳です。



135 偕行社を改装し短大本館へ（昭和33年12月）



137 2 階の日本間で茶道の実習。洋風の上下窓が偕行社時代の名残りです。（昭和34年頃）



140 昭和57年の短大本館



136 2 階西側を改装中（昭和33年12月）



138 短大本館 2 階南東側のタイプ室（昭和34年頃）



139 佐野えんね教授のドイツ語講義（昭和39～47年頃）



141 2026年夏の短大本館跡

(9) 大講堂から第2体育館までの変遷

昭和2年(1927) 11月、豊橋陸軍教導学校の開校に合わせて、東門南側に大講堂が新設されました。戦後、陸軍が解体したあと、昭和21年(1946)の愛知大学設立後も建物はそのまま講堂として利用されました。大講堂は現在も第2体育館として活用されています。

大講堂

大講堂は、トラス構造の鉄骨架構に木造の下見板張り壁を組み合わせた建物で、豊橋市内の陸軍施設の中では珍しい構造でした[1]。大講堂は儀式を執り行う場にとどまらず、剣道などの武道修習や精神教育を通じて、心身を鍛錬する道場でもありました。また、学生全員を収容できる大講堂には、活動写真の映写設備も備えていました。

(1)大講堂のトラス構造は、L字鋼を用いて三角形を基本単位として組み合わせた骨組み構造です。



142 南側立面図　出典:泉田英雄2020



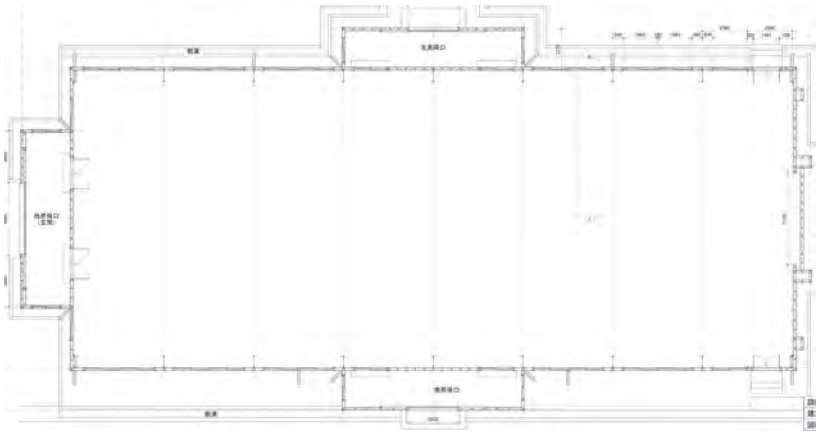
143 昭和5年の外観(西側)。



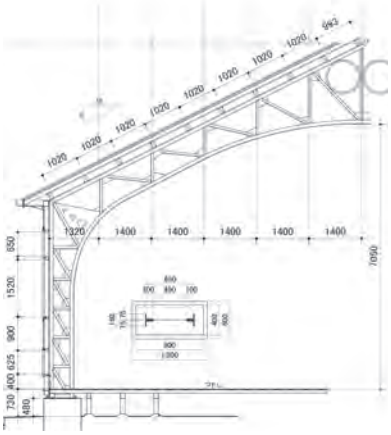
144 昭和8年頃の外観(西側)。写真143と外壁の色が異なります。



145 昭和15年頃の外観(西側)。昭和10年に正面玄関ホールと、南北に昇降口が増築されました。屋根には櫓があります。



平面図



梁間16.6m、桁行40.0m（トラス組柱の外面間）。L型鋼をトラスに組んで柱梁とし、切妻屋根を支えています。



146 大講堂を支えるトラス構造。頂点には丸形のプレートをつけ、全体はリベット（鋲）で接合されています。



147 剣道の練習風景（昭和６年）

column

大講堂前の記念樹

豊橋陸軍教導学校の大講堂として新設された建物は、現在は愛知大学の第２体育館として利用されています。第２体育館の前には円形の築山があり、立派な松の木がそびえていますが、これは昭和２年の昭和天皇行幸を記念して植樹されたものです。

11月21日、天皇は豊橋の陸軍歩兵第十八聯隊を訪れ、向山の工兵第三大隊作業場を経て、高師村の教導学校に臨幸されました。将校集会所で休憩し、武田校長の奏上を聞かれたあと、大講堂に行き、さらに校庭で教導学校生徒の分列式を親閲、そのあと隣の騎兵旅団司令部に赴かれました。天皇が還御したあと、大講堂の前の築山に記念の松が植えられましたが、植樹をしたのは豊橋市花田町稲場長寿園庭師の荻野長重郎で、「陛下の御足跡の土を纏めて、謹んで植樹した」と、11月23日の新聞記事にみえます。11月22日の『豊橋日日新聞』には「陛下には御乗馬にて庭外に出させられ、大講堂前にて御下馬、講堂に入らせられ、堂外の記念樹を植える築山に玉歩を運びたまい、再び御乗馬にて校庭に整列せる職員生徒を御親閲あらせられ」という記事があるので、記念樹を植えるための築山はすでに用意されており、天皇は馬から下りて築山に足を運ばれたというのが真相のようです。

『豊橋陸軍教導学校卒業記念写真帖』の中の写真には、大講堂前の築山と植樹された松がみえ（写真143、144）、築山の階段がはじめからあったこともわかります。



148 高窓（横軸回転窓）が開いている状態。（昭和34年）



149 床付近に滞留する湿った空気を動かす地窓、温められ上昇する空気を排出する高窓が設けてあります。



150 東南出入口前で角力をとる教導学校の学生。扉は観音開き。（昭和16年頃）



151 正面玄関扉の取っ手



152 正面玄関扉小窓



153 丸と四角を組み合わせたデザインの持ち送り



154 東南側出入口。かつて観音開きだった扉は引違い戸に変更されています（改装時期不詳）。

講堂・体育館 〉第２体育館 〉

昭和２年（1927）に建てられた豊橋陸軍教導学校の大講堂は、昭和 21 年（1946）の愛知大学設立以降も数回の改修・補強工事を経て、講堂や体育館として活用されました。卒業式などの記念式典や講演の会場としてだけでなく、学生による祭典の場としても利用される、学内の重要施設の一つでした。昭和 58 年（1983）に鉄筋構造の新体育館が完成すると、旧大講堂の名称は第２体育館になります。

近年は式典が学外で行われるようになり、建物の用途は限定されるようになりましたが、正面玄関に見られるアール・デコ調の意匠など、往時の特徴を今に伝える建造物として現存しています。



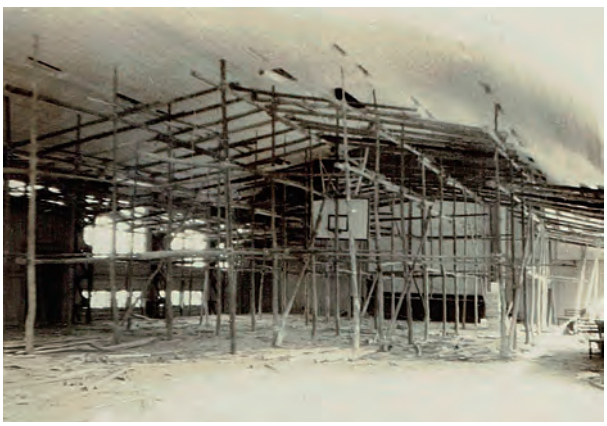
155 寮祭での一コマ（昭和26年頃）



156 トラス架構に天井を張る直前の写真（昭和34年）



157 昭和34年にトラス架構に天井を張る工事が行われました。竹材のようなものを張っています。２月16日着工、３月18日完了。なお、工事中の２月19日に小岩井浄学長が逝去し、26日にこの場所で大学葬が行われました。



158 天井を張る工事の足場（昭和34年）
この天井は2000年頃に取り外しています。

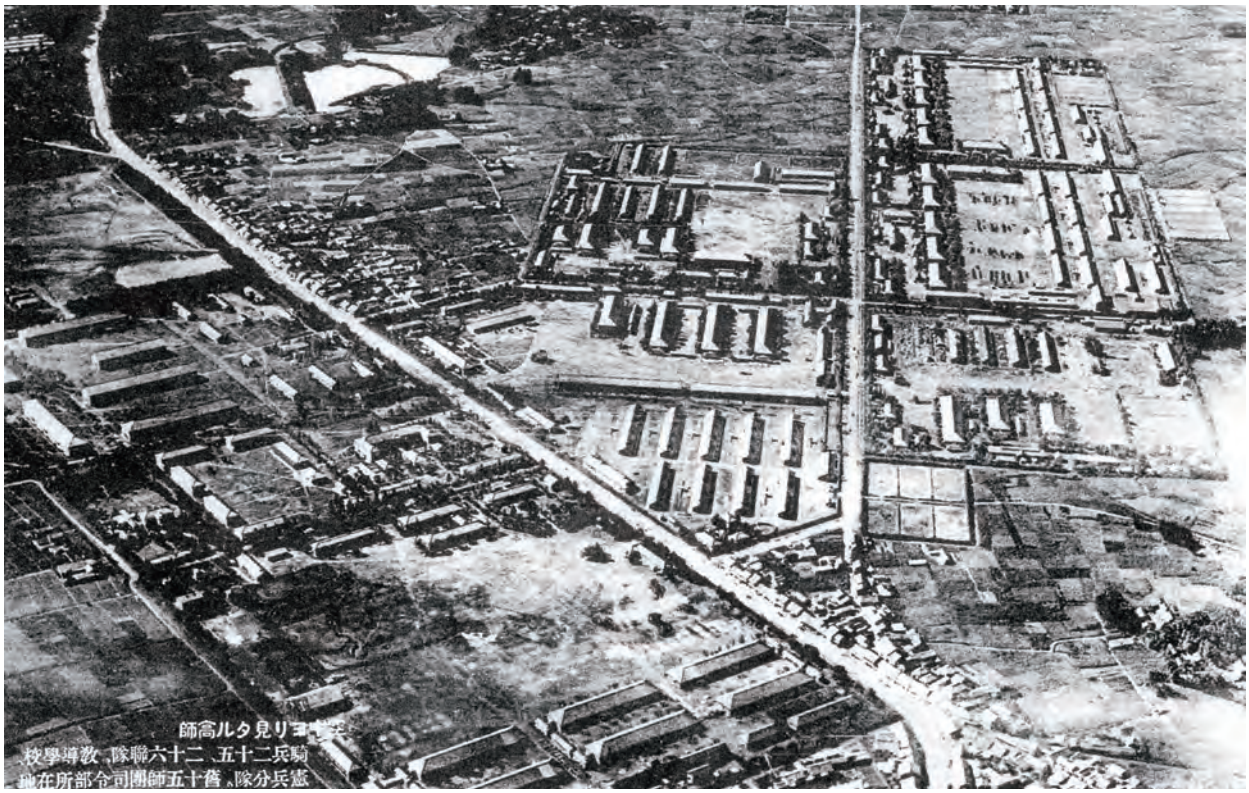


159 剣道部・バスケットボール部ほかさまざまな運動部が活用しました。（昭和39年頃）

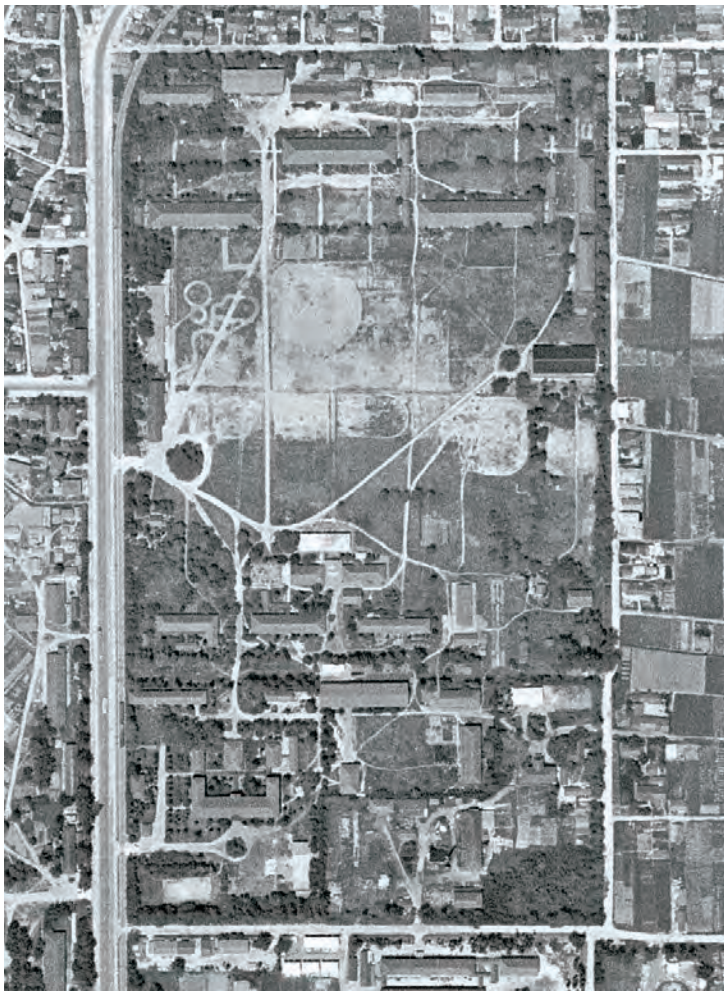


160 2026年夏の第２体育館と松の木

3 空からみる豊橋キャンパス



161 昭和初年　「空中ヨリ見タル高師」豊橋市図書館蔵



162 昭和34年　鉄筋コンクリートの建物は図書館書庫（昭和32年竣工）のみです。

画像提供：国土地理院



163 昭和40年頃　4 号館（昭和38年竣工）や 3 号館（昭和39年 8 月竣工）が完成しています。 ※建設当初の名称とは異なる。



164 昭和43年12月　旧研究館や 3 代目図書館が完成しています（昭和41年竣工）。 ※旧研究館は現在そよかぜ広場となっています。



165 昭和54年５月　副門前に学生会館、第１サークル棟（昭和46年竣工）が完成しています。



166 昭和58年夏　第２サークル棟（昭和58年８月竣工）があり、また体育館（同年12月竣工）を建設しています。



167 平成７年　梢風館（平成７年２月竣工）が完成しています。



168 2025年冬　センタービルが完成しました。

年表

年月日		できごと
明治41年（1908）		陸軍第十五師団が愛知県渥美郡高師村に設置され、歩兵第六十聯隊などが置かれる。司令部庁舎や歩兵第六十聯隊将校集会所、兵営施設など竣工。
明治42年（1909）		豊橋偕行社竣工。騎兵第四旅団が豊橋に設置される。
大正14年（1925）		陸軍第十五師団が廃止となる。
昭和２年（1927）	７月１日	旧歩兵第六十聯隊の跡地に豊橋陸軍教導学校（歩兵科）が設立される。 歩兵第六十聯隊当時の社殿跡を継承し、社祠を設け校内神社とする。
	11月中旬	大講堂竣工。
昭和４年（1929）	９月	校内神社を豊秋津神社と改称。
昭和６年（1931）		学校西側の校門と鉄筋コンクリート塀を新築。
昭和７年（1932）	３月28日	養正舎開舎。
	４月３日	勅諭塔（記念塔）竣工。
昭和８年（1933）		豊橋陸軍教導学校に騎兵科・砲兵科が増設され、敷地・設備も拡充される。旧師団軍司令部跡は教導学校の本部となる。
昭和14年（1939）		豊橋陸軍予備士官学校が、豊橋陸軍教導学校に併設される。
昭和15年（1940）		豊橋陸軍教導学校が西口町へ移転。
昭和18年（1943）	７月	豊橋陸軍教導学校が「豊橋陸軍第二予備士官学校」に改称し、豊橋陸軍予備士官学校は「豊橋陸軍第一予備士官学校」と改称。
昭和20年（1945）	８月	15日に終戦となり、豊橋陸軍第一予備士官学校※も閉校。
昭和21年（1946）	11月15日	愛知大学設立
昭和22年（1947）	４月	旧将校集会所の建物に図書館（初代）を開設。
昭和29年（1954）	12月	７番教室棟（旧通信隊生徒舎）が火災により半分焼失。
昭和32年（1957）	３月	耐火書庫（RC造２階建）が竣工。改築も兼ねた図書館（２代目）となる。
昭和34年（1959）	１月	弓道場新設（現在の記念会館の場所）。
	３月	短大設置にともなう旧豊橋偕行社の改装工事竣工。短大１号館（RC造２階建）着工。
昭和37年（1962）	８月	旧火薬庫を取り壊し、プールを建設。
昭和38年（1963）	３月	４号館（RC造２階建）を竣工。
	10月	豊橋本部敷地払下げを受ける（157,590㎡、短大敷地は含まず）。
昭和39年（1964）	８月	３号館（RC造２階建）竣工。
昭和41年（1966）	10月	研究館（RC造４階建）竣工。 ３代目の図書館（RC造２階建）竣工。
昭和46年（1971）	11月	学生会館（RC造４階建）および第１サークル棟（RC造４階建）を竣工。
昭和48年（1973）	12月	豊橋校舎１号館〔大学院棟〕（RC造４階建）竣工。８～15番教室棟（旧二機生徒舎）跡地に、２号館（RC造４階建）竣工。
昭和51年（1976）	３月	図書館第１書庫（RC造６階建）、短大３号館（RC造４階建）および７号館（RC造４階建）を竣工。
昭和53年（1978）	11月	前年に弓道場は新整備地へ移転し、その跡地に記念会館（RC造３階建）を竣工。
昭和58年（1983）	８月	第２サークル棟（RC造５階建）および合宿所（S造２階建）竣工。
	12月	旧大学院棟（旧歩兵砲生徒舎）解体。 体育館（RC造２階建）竣工。
昭和59年（1984）	８月	豊橋鉄道渥美線地下化工事にともない本学敷地内に仮線を敷設する。
昭和63年（1988）	２月	思草寮・翠嵐寮（旧歩一生徒舎・歩三生徒舎）解体。
平成７年（1995）	２月	梢風館（RC造３階建）竣工。
平成８年（1996）	11月	新本館（RC造６階建）、守衛室（RC造平家建）竣工。
平成９年（1997）	12月	学生会館（SRC造３階建）および逍遥館（SRC造２階建）竣工。
平成10年（1998）	１月	旧本館が文化庁登録有形文化財に指定される。５月、大学記念館（旧本館）開館。
	３月	５号館・６号館（ともにRC造５階建）竣工。
平成11年（1999）	３月	図書館増改築（RC造３階建）竣工。
平成15年（2003）	11月	豊橋校舎野球部雨天練習場（S造、平家建）竣工。
平成17年（2005）	７月	現在の研究館（S造８階建）竣工。
平成19年（2007）	12月	豊橋校舎馬術部厩舎（木造瓦葺）竣工。
平成23年（2011）		短大本館（旧豊橋偕行社）解体。
令和７年（2025）	３月	センタービル（S造４階建）竣工。

※高士会『嗚呼、豊橋』によれば、豊橋陸軍第一予備士官学校は、昭和20年７月に名称を「豊橋陸軍予備士官学校」に戻したとあるが、昭和21年の愛知大学設立関係書類に「豊橋陸軍第一予備士官学校」との記載があるのをここでは採用した。

【謝辞】（敬称略・五十音順）

本展覧会の開催および図録作成にあたり下記の方々のご協力をいただきました。
記して感謝の意を表します。
豊橋市図書館
会田正彦、市川典子、柿崎純平、加納寛、塩山正純、清水伸子、鈴木周唯、鈴木ちえ子、田中博久、田辺勝巳、中村直美、成瀬さよ子、新井野洋一、畑脇照代、藤田佳久、光松篤、山田稔、そのほか多くの愛知大学卒業生および元職員の方々
企画課、豊橋研究支援課、豊橋総務課、豊橋体育研究室、大学記念館、中部地方産業研究所

【主要参考文献】

松浦豊一『豊橋陸軍教導学校一班』（友愛堂書店、1933年）
陸軍壮丁教育会編『仙台・豊橋・熊本陸軍教導学校入学案内』（陸軍壮丁教育会、1936年）
愛知大学十年史編纂委員会編『愛知大学 十年のあゆみ』（愛知大学、1956年）
愛知大学二十年史編纂委員会編『愛知大学 二十年のあゆみ』（愛知大学、1972年）
伊藤崇郎編著『殉皇―豊橋陸軍豫備士官学校の記―（復刻版）』（中央公論事業出版、1980年）
小野木重勝「旧陸軍第十五師団司令部庁舎―旧陸軍第十五師団兵営遺構の研究(1)―」（日本建築学会関東支部編『研究報告集 . 計画系』63 巻、1993年）
高士会編『嗚呼、豊橋―学校所在碑序幕記念誌―』（高士会、1995年）
愛知大学 50 年史編纂委員会編『写真集 愛知大学の歴史 1946 ～ 1996』（愛知大学、1996年）
愛知大学創設期からの想い出写真文集編集部編『愛知大学創設期からの想い出写真文集』（愛知大学創設期からの想い出写真文集編集部、1997年）
愛知大学五十年史編纂委員会編『愛知大学五十年史 通史編』（愛知大学、2000年）
小野木重勝「旧陸軍第十五師団将校集会所・偕行社―旧陸軍第十五師団兵営遺構の研究(3)―」（日本建築学会編『学術講演梗概集 . F－2 , 建築歴史・意匠』、2001年）
愛知大学中部地方産業研究所編『中産研60年のあゆみ』（愛知大学中部地方産業研究所、2013年）
泉田英雄「偕行社の建造物文化財調査」（『愛知大学綜合郷土研究所紀要』第58輯、2013年）
藤田昌雄『日本陸軍の基礎知識―昭和の生活編－』（潮書房光人新社、2018年）
愛知大学綜合郷土研究所編『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書 2020年度』（愛知大学綜合郷土研究所、2021年）
愛知大学綜合郷土研究所編『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書 2021年度』（愛知大学綜合郷土研究所、2022年）
愛知大学綜合郷土研究所編『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書 2022年度』（愛知大学綜合郷土研究所、2023年）
愛知大学綜合郷土研究所編『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 最終報告書 2020～ 2022年度』（愛知大学綜合郷土研究所、2023年）
山田邦明・泉田英雄『豊橋と陸軍師団―歴史と建物―』（シンプリ、2023年）
愛知大学綜合郷土研究所編『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 調査報告書続編』（愛知大学綜合郷土研究所、2025年）
白数夏生・倉方俊輔「日露戦争を経た旧日本陸軍の兵器廠施設における標準設計についての研究―兵器格納倉庫『範式』に注目して―」（日本建築学会編『日本建築学会計画系論文集』91巻842号、2026年）
このほか年度ごとの『愛知大学要覧』『愛知大学学生便覧』



愛知大学創立 80 周年記念企画展
写真でみるあの場所の移り変わり ―昭和と愛知大学―

編集・発行 | 愛知大学綜合郷土研究所　〒441-8522 豊橋市町畑町 1-1
発　行　日 | 2026年10月
印　　刷 | ㈱シンプリ